

普通のことができない俺が、異世界ではチート並みになんでも出来る無双者！？

H A L

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

☆*☆*☆*☆*☆*☆*☆*☆*☆

ある日、俺は交通事故に合った。

「……、どこだよ……？」

見知らぬ場所。なんだか雲の上にいるみたいな。

「……は神の部屋じゃよ」

そこにいかにも頭の悪そうなこと言つてる老人口調の男がそこにいた。

なんだ、男かよ…：

「男で悪かつたの」

「!？」

心が読めるとかファンタジーの世界にでも連れてこられたのかと思つた。だがどうやらそうらしい。

何も出来ない引きこもりニートから異世界へ飛ばされた俺は、チート並みになんでも出来る無双者へと変貌したお話。
これから俺に、一体何が起きるんだ……？

☆*☆*☆*☆*☆*☆*☆*☆

引きこもりニートが相棒と自分を変えるために自分探しの旅。恋

もあるかも…?

異世界転生モノです。

主人公は最強でチートで無双者です。

性癖だだ漏れな自己満足物語。

なんでも許せる人にオススメなお話です。

ではまずは【はじめに】を読んでから本編へ。

【2020年03月11日：執筆開始】

目 次

【はじめ】					
【自己紹介】					
【簡単なあらすじ】					
【俺達の第2の人生、まずは…】					
【2日目、街に向かうがそこには…】					
【3日目、拠点が決まったところで…】					
63	36	22	7	4	1

【はじめに】

どうも、作者のH A Lです。

久しぶりの小説です。

そしてまた異世界モノの話を書こうと思つてます。

自分の趣味みたいに書いてた

イジメから始まり自殺して異世界では平和に暮らす
そんな感じの話が好きなのですが。

今回は引きこもりニートから交通事故で

神様から授かるチート並みのステータスで無双者にな
つていう、僕の中での新しい話の切り口です。

愛のない世界から異世界へではなく

愛のある世界だけど異世界へって感じです。

本当は愛を持つて接しているのに主人公の中では

『こんな自分に愛を注いでも何も返せないのに』と

コンプレックス抱いて今の年齢です。

そんなネガティブに考えなくともとか思うかも

されませんが、本人にとつては大事なことです。

他人が見ればちっぽけな考え方だなあとか思うかも
は大変で大事件つてことです。

主人公はそういったコンプレックスを持つてるので、どうか温か
い目で見てあげてください。

それから異世界に行つた後の主人公の行方も
優しい眼差しで見守つてあげてください。

よろしくお願ひしますく（ーー）へ

さて次に、注意事項です。

毎回書いてますが

前にこここのサイトがどこかのサイトで

「普通の恋愛モノかと思つたらBLだった。

ちよつと自分には合わないかなあ」

というメッセージがありました。

一応僕は注意事項はちゃんと書いてます。

その後、見るのは読者の方です。

何度何度言いますが

ここは自己満足に書いて自己責任な物語です。
なんでも許せる方にオススメをしています。

1つでも無理だなって思つた人はブラウザバツク。
まだこのページにいるのならちゃんと注意事項を
よく読んでから本編へ進むようにして下さいね?
それと、どの作品でもオリジナルキャラを
使う際は必ず【自己紹介】を挟みます。

主人公には固定概念を持つてますので変更が
あるとすればそれは本編で変わることがあります。
絶対に外したくないつていう固定概念は
どんな物語でもその路線は貫くので大丈夫です。
さて、長くなりましたが注意事項を書きます。
もう一度、しつこく言いますが

注意事項をよく読んでからご覧になつてください。

※注意事項※

- ・ファンタジー寄りだけど恋愛要素有り
- ・恋愛は基本『B L』＼＼（・。・、）ココ重要!!
- ・これから出てくるキャラによつて顔文字有り
- ・主人公固定概念最強無双型
- ・女性も少しばかりとも思う
- ・自己満足と自己責任で構成された物語図
- ・文の誤字脱字へのコメントはOK
- ・なんでも許してくれるような優しい人にオススメ
- ・誹謗中傷はお断り
- ・性癖力オスでお花畠な状態のポンコツ作者

最後は自分で罵倒しましたが、非常に亀更新です。
いつ更新するかわからないので期待しない程度に
待つていただけすると幸いです。

それでは【自己紹介】に進んだ後、本編です。
ここまで見てくださいありがとうございます。
この先も精進していきますので
今後ともよろしくお願ひします<（　　）>
作者のH A Lでした（。・・）ノ。

【自己紹介】

【自己紹介】

名前：黒神 遼（クロガミ ハル）→ハル

性別：男↓男の娘

年齢：25歳→15歳

性格

憧れを妄想し理想やハードルが高い夢男子
ネガティブすぎな自己中
シャイボーリーを隠したがるクールなツンデレ
本当は寂しがり屋で泣き虫で強がりたいだけの弱虫

容姿

25歳：黒いパークーに黒いズボン、黒いサンダル
髪はボサボサで洗つてなくて臭い黒髪

一重で半目の目つきが悪い黒縁メガネをした黒目
身長は178cm

15歳：異世界での服装（※本編で紹介）

髪はウルフカットのショートヘアで黒髪
一重で半目の眠そうな目つきなオッドアイ

（※左が闇が深そうな紫で右が透き通るような空色）

黒い猫耳と尻尾が生えている

身長は155cm

種族：人間→猫獣人（人間寄り）

備考

普通のことが出来ないことがコンプレックス。
ずっと実家暮らして貧乏というわけじやないし
愛を貰つてない訳じやないが
自立ができないことに悩む。

25歳になつてもぬいぐるみが手放せなくて
ずっと持ち歩いてる、名前はクロ。

黒猫でオツドアイで右が黄色で左が水色。

2次元でもオツドアイとかを見ると羨ましがるほど
オツドアイに憧れを持っている。

クロが自分よりも歳が上でも下でも
自分を見てくれるような擬人化とか
してくれないかなとか常に思う。

家にいても引きこもりニートでハエが飛んでそうな
くらい髪はボサボサで、たまに外に出てもパークーを深く被つてコ
ンビニで買い物をしたりと

適度に外には出るが社会不適合者。

そんなある日のコンビニ帰りで交通事故に合う。
その時の手持ちはぬいぐるみのクロと買い物袋。
そのまま即死で、でもクロだけは離さなかった。
目が覚めた場所は雲の上、神様のちゃぶ台の前。
ぬいぐるみのクロと一緒に2度目の人生を歩む。

→ → 現実世界 →

← ← 異世界 ← ←

コミュニケーションは普通。

料理は物さえあればなんでも作れる。

サブジョブで鑑定士を持つていてメインで冒険者。
レベル形式だけどレベルは+9999。

(※スキルは本編で紹介)

思考能力や記憶は前世のまま持っている。

事故とか黒歴史等の自分に都合が悪く

忘れないと思ってる記憶だけは無くなってる。

15歳ではあるが声はシヨタというより成人男性声。

猫獣人は猫になつたら猫の言葉がわかるという
憧れの種族なので、絶対になりたいと思つていた。
オツドアイも自分のぬいぐるみや二次元キャラが
そういうデザインだつたつてことから自分も
オツドアイだつたらという憧れを抱いていた。

猫獣人になると人間の耳もあるのかなって思つてたが、それはないようで本当に憧れの耳が手に入つて嬉しいと思つてる。
第2の人生がこんなに幸せでいいのかと正直思つてるが神に感謝しかないと思つてる。

【簡単なあらすじ】

俺は黒神遼。所謂、引きこもりニートだった。仕事もろくに出来ず実家暮らしで外へも行かない。言つても小遣いでコンビニ行つて何か買つてくることくらい。

だいたい食べ物だけど…

母親も父親も兄貴も別に俺に対しても邪魔とか、もつと働けよとか、自宅警備員とか古すぎワロタとか、そんなことは言つてこない。普通に放置。

まあ、内心ではそう思つてんじやねえかな…

極めつけに俺は『普通のことが何も出来ない』。どういう意味かと言うと、普通の生活ができない。親に何かしてもらわないとできないようなそんな奴。

俺自身、発達障害とかあんのかも不明だけど…

それに近いかもしれない。普通の子は風呂だつて歯磨きだつてちゃんとやるのに、俺はその『普通』のことができない。だから社会不適合者。

本当は俺なんてこの世に生きる価値なんてない…

それでも、俺の唯一の支えはいつも持ち歩いてるコイツ。黒猫でぬいぐるみのオッドアイで、名前はクロ。コイツはゴミ捨て場で捨てられてたぬいぐるみ。最初は捨てられたんだなと思ってスルーしようと思った。でも、俺にだつて良心はある。助けたいと思って助けた。親には内緒だつたけど次の日にバレた。

今では俺の相棒だし大事な家族

そんなある日、俺は交通事故にあつたらしい。即死レベルに俺の体は変な方向に曲がり、内蔵も骨によつてグツサリ。そんな感じだったから俺は事故後に死亡。そして今に至る。

その内容を簡単に教えてくれたのが目の前にいる…

「そこまで思うなら最後まで言わんか！」

神様のようなそうじやないような神様。

「神様じゃ！神様！」

ツツコミし続ける神様。しかも俺の中での神様は老人か美人美女。なのに目の前にいるのは老人口調の男が、お茶をすすりながら俺の前にいた。

非常に怪しい：

「怪しくないわ。それに神様は雲の上に居るという、お前さんの理想は叶つておるじやろ？」

確かに俺の中での神様は雲の上にいる。でも城みたいな豪邸もちよつと期待してたけど、そこは理想とはかけはなれていた。ちやぶ台の上にお茶せんべい、周りにはタンスやらなんやらしかなかつた。貧乏神様。

「それ以上、悪口を言うならお前さんの『持つておる』その子を……ホイッ！」

「は？」

神の指が上を向いてるので上を向くとぬいぐるみのクロがいた。俺は大切な相棒を取られ、取り返そうとするが取れない。

「返せよ！俺の相棒を取るな！」

「悪口に対して誠心誠意謝るのなら返してやる」

面倒臭い神様だった。

「面倒臭いなら仕方ないのう？今謝ればお前さんの願いを叶えてやろうと思つたんじやが」

「俺の願い？」

俺は首をかしげた。何を言つてののかイマイチ理解ができなくて、ずっとクロを見ていた。神様は俺の前で何か魔法のようなのを唱えた。すると煙とともに『ボンツ！』という音で周りが見えなくなつた。「な、なんだ!?」

そこにいるのはぬいぐるみのクロではなく、黒猫耳と尻尾、それからぬいぐるみのクロのチャームポイントであるオッドアイの男の子がそこにいた。

「く、クロ…？」

「…ハルしゃん！」

思わず囁く。しかも裸だ。顔真っ赤にして顔を隠す。呆れた神様がクロに似合う服を着させてくれた。なんというか俺の生きてきた服装とは程遠い、村人A的な服装だった。

もう少し動きやすい服装とかなかつたのかよ…

「注文が多いのう…」

指をパチンと鳴らすとクロの服装が変わった。村人Aというような服装よりはいい生地を使つた素材のようだ。

うん??なんでいい生地つてわかつたんだ??

「その辺は後で説明するわい」

後回しにされた。ひとまず擬人化されたクロの見た目的な身長は150cm。俺よりも低かつた。

うーん、小学生か中学生……それか高校生になつた辺りの年齢層か
⋮?

とにかく幼く見えるのでそう思つてしまふ。疑問は絶えないが、とりあえずまず神様に確認。

「これはクロか?」

「そうじや」

「ぬいぐるみの?」

「そうじや」

「俺の願いつて擬人化?」

「そうじや」

「俺の相棒?」

「そうじや。だが」
「だが??」

「クロよ」

「はい?」

「お前さんの主はワシの悪口ばかり言うんじや」

「へ?」

「それはいけません! 神様に悪くいうなんて!」

「い、いや!? そんな悪口言つてないだろ!?」

「ああ言つておるが、心中ではワシを馬鹿にするんじやよ…。シクシク…」

「あーー！泣かないで？よしよし」

神様がニカツと笑う。俺はイラツとした。そこのポジションは俺なのになんでクソ最低な神様にクロのよしよしを盗られなきやならんのかとそう思つた。

「今クソ最低な神様と悪口を言われたのじやあ!!クロお…、ワシはクソ最低な神様に見えるかのう…？」

「ううん、見えないよ！むしろボクに命を宿してくれた恩人に對してそんなこと思うなんて、それこそ最低な人だよ！」

グサツ!!!

うう…、それを俺に向けるわけじやないのに胸が痛い…。コノヤロウ…

「それに神様？」

「なんじや？」

「ハルさんはそんな風に思う人ではないですよ？」

「そうなのか？」

クロはナイスなフォローを入れようとしていた。俺は今すぐ感動している。一度は毒を吐かれたが、クロがそんなこと言うなんてありえないぞうと思つた。

「ハルさんがもし、そんな風に言う人ならボクはハルさんとお外に出るのやめます。ぬいぐるみに戻してください」
え??

「確かに、時々ボクの知らない所で言つてるかもしれません。それでも、それはハルさんにとつて負けたくないというかなんというか…」

「ボクに嘘をつかない、なんでも話してくれてとても優しい命の恩人がそんな『汚い言葉』や『汚い行動』を起こすなんて考えたくありません」

なんかすごい恥ずかしい…。しかもさらりと胸に突き刺す言葉を言つてくる…

「ボクのハルさんがそんな言葉を発するなんて、絶対にありえませんけど、もしそれが本当ならボク…」

え??えつ??何??何なの??クロ……??

「ボクを燃やしーー」

「それはダメだっ!!絶対に許さないぞっ!!」

「……こう言つておるが?」

「なら、ハルさん」

「な、なんだよ…?」

「少しでも神様に汚い言葉を言つてたなら神様に謝つてください。ボク達の恩人なんですよ? それなのにそんな言い方したらダメです。せつかくボクのお願いも叶うと思つたのに…」

クロの願い…?

「ど、どういうことだ…?」

「その疑問の答えはハルさんが神様に謝つた後に言つてあげます。しないなら言いません!」

しかめつ面で Pruittと顔を逸らされてしまった。ぬいぐるみに戻されて火で焼かれるなんて見たくない。かと言つてこの神様に謝るものもしたくない。でもクロは本気のようで俺の言葉によつて行動を起こす勢いだつた。これは絶対に阻止しなければならない。

けど、信頼出来る神様……つて感じでもないんだよな…。怪しい神様でしかないんだよな…。

怪しいと言う顔で神様を見ているとクロが追い打ちをかけてきた。
「神様、やつぱりボクをぬいぐるみにしてください。ハルさんは全然謝る気はないようです。その後燃やしてください」

「えつ、あつ、ちよつ…!!」

ま、待つてくれ!!

神様がこつちを見てからクロを見た。ため息を吐いてから言つた。
「仕方ないのう…。お前さんの主は謝る気が本気でないようじやし、それにワシのことを怪しい神様でしか見てないようじやしの。ならば

『ボツ』とどこから出したのか知らないが指から炎が灯つてゐる。つまり

りそれでクロを焼くつもりなんだとわかつた。

ダメっ!!ダメだっ!!クロは俺の……俺の相棒なんだっ!!クロが居なくなつたら俺は……生きていけない……。……クロ……クロ……クロお……

俺はクロに対してだけはプライドなどない。俺は強くない。俺は何も出来ない。何もしてこなかつた。ただクロと一緒にいただけで、全然生活やらなんやらしてきてない。異世界に行けたとしても俺は今みたいに無力だ。何も出来やしない。それでもクロを失うくらいならと、俺は正座をし頭を下げて神様に謝った。

「汚い言葉を並べてずっと神様をけなしました……。お願ひです……、クロを焼かないでください……。クロがいなくなつたら俺は今二度目の死を迎えてもいい。クロさえそばにいてくれれば俺は幸せです……。でも、そのクロも俺から離れて消えていくならプライドなんてないです……。ごめんなさい……」「ごめんなさい……」

当初の目的は果たせて神様もクロも俺を許そうとした。でも俺は今まで生きててずつと思つてたことを、コンプレックスだったことを謝り始めた。止まることなく、懺悔のように。

「生きててすみません、息をしててすみません。生活も何も出来ないような、社会不適合者でごめんない。俺はいつもいつも人を羨んできました。自分はそれをしようともせずただただ出来ないと括りつけて、行動すればすぐにできるのにそれをしない。そんなカスです……。もつとちゃんとこの歳になるまでに出来たはずなのに、全然やれなくて……。それを家族みんな俺を心配するとか愛をくれます。罵るでなく、暴力振るうでなく、ただ放置してくれるだけ。俺の生きたいように生かしてくれてありがとうございます。こんなカスに愛をくれてありがとうございます。自立ができない社会不適合者な俺をここまで育ててくれてありがとうございます……。ぐす……汚かったクロを捨てないでくれてありがとうございます……。……すごく幸せでした……、本当にありがとうございます。お母さん……お父さん……兄貴……。……もう、俺みたいな社会不適合者がいなくなつて清々してゐかも知れないけど、それでも俺を陰ながら見ててくれてありがとうございます……、……さよう

なら、みんな……」

泣きながら神様にそれを伝えた。いつも思つてたことを全部、いつ
べんに。こんなことならちゃんと感謝の気持ちも謝罪の気持ちも全
部、言つておけばよかつたと今更後悔する。放置だつたとしても俺を
心配してただろうし、世間に見せたくないと思つてただろうし、なん
で生きてるんだつて思われてただろうしとたくさん色んなことを
思つた。もう未練はない。家族がどんな風に思つても俺は自覚が
あるから気にならない。クロさえいてくれれば、俺の1番信頼できる
相棒がいてくれれば俺は幸せなのだ。下を向いてたからわからなか
つたが俺をギュッと抱きしめてよしよししてくれた。クロなんか
神様なのかわからないけど、俺は泣き喚いて叫び涙を流し続けた。

しばらく泣いた俺は、スッキリしたのか泣き止んだ。顔を上げると
そこに居たのはクロだつた。頭をよしよししながら優しく抱きしめ
てくれた。小さいのにしつかりしてる。俺よりもクロは『出来る子』
だつた。

「そろそろ、お前さんの話をしよう」

また俺がネガティブなことを考える前にと、神様が話を切り出し
た。

「お前さんの交通事故の原因は、居眠り運転じや。夜中じやからのう、
疲れておつたのじやろうな。そのままお前さんをはねた後、電信柱に
激突した。そやつは今病院で手術中だそうじや」

お茶をすすり終わつた神様がこつちを見てそう言つた。死因とか
気にしてないけど、思つたより在り来りな事故死なのでなんとも言え
ない。

てか、別に忘れてていいことをなぜ思い出させるか…

神様はその話から一変して異世界の話をし始めた。

「お前さんの行く先はあの世だつたのだが、ワシの所に願う猫が来て
のう。そやつの願いを叶えるために、お前さんをここに呼んだん
じや」

「願う猫…？」

それは一体誰のことなのか、首を傾げると。

「ボクだよ、ハルさん」

クロが俺の前で正座をして話した。俺はまた首を傾げていると、クロが気にせず話した。

「ボクのお願いをね？ 神様が聞いてくれて叶えてあげるって言つてくれたんだ。だからボクは今ハルさん前にいるんだよ」

上手く飲み込めない。それがどうクロに繋がるのか。俺は何も言えずにただ話を聞いていた。ここで遮つても俺自身が分からぬだけだからと。

「ボクのお願いはね？ ハルさんと一緒に生きていきたい。ハルさんをずっと見てて僕が弟でも兄でもどっちでもいいと思ってたけど、ハルさんがいつも寂しそうに見つめてて僕の前では夢いっぱいに楽しく話してて姿しか見させてくれないけど、ボクは知ってるよ？ 時にハルさんはナルシストのように自分がもし異世界に行つたら強いんだからと豪語するけど、そこには寂しさを感じたんだ。そこにボクがいたらもつと笑つて言つてくれるかなつて。このまま死んで後悔するくらいならボクと一緒に生きて、後悔のない人生を生きて欲しいつて思つたの。ハルさんの言葉から『生きてて楽しい』つて、それが聞けたらボクのお願いは叶つたものだから。でもまずはハルさんと一緒に第2の人生を生きたい。それを神様にお願いしたの」

上手くまとめてるよう見えて同じことを何度も、意味の似た言葉を並べるクロ。

大事な事なので、的な要素だなあ…

クロの言葉から神様もそれにつられて話し出す。

「死ぬまぎ間に、お前さんの大好きな猫がそういう願いをしてきたからそれに応えてやろうと思つたんじやよ。それとのう、クロはぬいぐるみじやろ？ お前さんの気持ち次第でこういうことも出来る」

『ボンッ！』と音とともに煙が出た。煙の演出はいらなくないかと思う。いつつ、それがお約束のようなのでしかたない。煙がはけられクロを見るとイケメンになつていた。俺が25歳ならクロは28歳か俺と同じくらいの歳だ。それと俺の身長と変わらない背格好だ。

「ハルさん」

声もイケボだつた。イケボと言つても俺はそこまで声の種類を知らないが、世間が思う声と言うべきだらう。ちゃんと声変わりをした少し低いイケボだと思う。わからんけど。

「ハルさん？」

でもこう見ると俺だけに見せてくれるこのイケメンを俺だけが独占できると思うと、得だなと思った。俺が優越感に浸つていると、クロが俺の返事を待てずに耳元まで顔を近づけた。

「ハルさん」

「！」

ビクウツと肩が跳ねた。耳が弱い訳じやないが、世の女は耳元までイケメンのイケボを聞くとキュンつてすると聞くが、俺も耳を隠すほどにはクロの声は心臓のドキドキが収まらない。顔を赤くなりそうになつた。

これはヤバいもしれない…

「な、なんだ？ クロ…」

「ずっと話しかけてるのに全然返してくれないから、ハルさんの耳に話しかけなきゃいけなかつたんだよ？」

「ゞ、ごめn」

「それとも、ハルさんは耳元で話しかけないと僕の話は聞いてくれないのかな？」

「つ、…み、耳元で話さなくとも…だ、大丈夫だから…」

肩が跳ねる。これは破壊力がある。25歳の俺でもキュンつてしまふくなる。耳弱いわけじやないのに弱くなりそうだ。

俺はまだ女の子が好きだ、男を好きになる趣味はない…、…はずだよな…？

疑問に思つてしまふほど、クロがすぐカッコイイ。俺なんかよりもかつこよくて羨ましく感じる。

俺ももつとこんな風になれたなあ…、無理か

「ふう」

「ひやいつ!?」

変な声が出た。ただびっくりしただけなのに声が変だつた。体が震える、慣れないことされてまるで俺が女になつたみたいだつた。

お、俺……男だよな??

疑つてしまふほどにはクロに魅了されてる証拠。イタズラするクロに怒ろうとしたら、体勢を崩してクロに押し倒されてしまった。しかも体勢がヤバい、これはR18モノだ。描写はモザイクかけるが見せたら行けない気がする体勢だつた。助けを求めて神様を見るが、お茶を飲んでいた。

クソツッ…!!

「どうしたの？ハルさん」

「どうしたもこうしたもない!!

「く、クロ…！と、とりあえずどいてくれ…！た、頬むから…！」

目の前にはクロが居るだけなのにすごくドキドキする。顔を隠せないのでどいて欲しかつた。そこは素直なクロはすんなりどいてくれた。そしてお茶をすすつてる神様の胸ぐらを掴み。

「今すぐクロをさつきの大きさに戻せ…！」

クロには見せられない黒い顔をして神様に迫ると、神様もこれはと思いつクロの背格好を元の大きさに戻した。胸ぐらを掴むのをやめてホツとする。神様がコソコソと。

「なんじやお前さん、クロにドキドキしたのかの？」

「ち、違つ…!?」

「お前さんの気持ち次第で、ああいうこともできるんじやよ。弟のよううに甘えてきたり、兄のように甘えさせてくれるのじや。あの背格好で10歳じや。そしてさつきの背格好で22歳じやよ。お前さんの歳よりは下じや。上だつたらもう少し攻めてたと思うぞ？」

確かにと思つてしまふほどクロは大人とは言えない幼さがあつた気がする。とはいえ俺は1つ疑問に思つた。何か引っかかる言い方をしている。

「なんで弟にでもなれて兄にもなれるんだ？」

「それはお前さんの次に生まれ変わる体が、15歳のピチピチな背格好になるからじやよ☆」

とてつもなくムカつく声が聞こえたのでとりあえずグリグリしようとしたら、クロに止められた。

「ここから出たらその背格好になるから。変えることはできん、できるのはクロの背格好が変わるくらいじゃ。次の質問じや」

質問なんてされた覚えはないがそんなこと言つてると、また話が進まないので黙つておく。

「お前さんは何か欲しいステータスはあるのかの？」

ステータス、それはRPGならよくあるプロフィールにスキルや技能やらがたくさん書いてあるヤツだ。例えば基本的なものでいうと体力とか筋力とか瞬発力とか色々、小説や漫画でよくそういうことが書いてあって憧れだつた。その中でも1番多いのは最初から自分最强が多い。なんでも出来てなんでもチート。俺もそういうのを見てあれが欲しいとかこれがあればとか思ったこともある。でも、何をどう欲しいステータスがあるのかつて思うと悩ましいのである。

でもチート系なスキルとかチート系な技能とかはやつぱり欲しいよなあ：

神様は俺の心を読めるがあえてそこには触れずに話しかけてきた。
「最初こそまだ初心者じやが、メインジョブは冒険者じや。サブとして鑑定士とかどうじやろう？」

鑑定士といえば、見た物を説明とともに教えてくれる、所謂辞書みたいなものだ。

「鑑定士はあらゆるものを見通す力がある。魔物から人間から全ての物、そして本物か偽物まで見通すという上位鑑定士じや。これから行く異世界の中で1番上と言われる鑑定士ランクが今で言うとお前さんじや。お前さんのような鑑定士を欲しがる奴らは山ほどおるじやろう」

「じゃあなんでメインじゃないんだよ」

「メインに鑑定士じやと疑う者や、貴族の奴隸にもなりかねないからじや。上位鑑定士といえど、どこの世界にいようと死は隣り合わせじや。ましてや、クロもおる。もし奴隸などになつたらクロとは離れ離れじや。殺されるやもしれん、そうなつたら嫌じやろ？」

「そんなことさせない!!絶対にクロは俺が守る!!奴隸になんてなりたくない!!」

「じゃからサブじや。サブなら言わんで済む。隠しておける。色々な理由を付けても疑惑をかけられんで済む。つといった感じでの、ワシのオススメはサブが良いのではという提案じや。決めるのはお前さんじやよ、ワシはあくまで提案を持ち込んだるだけじや」

神様は意外と俺の事を思つての提案だつた。

色々言つて本当にごめんなさい、神様…

俺は改めてちゃんと考えた。リスクやらなんやらと。やつぱり俺の2度目の人生は良いものにしたいと。クロとこれから一緒に住むと考えると、メインで鑑定士はいろんな人達の名誉があつてこその方が安全だらうと思った。それならサブの方が変に思われないで出来ると思うと、そつちの方がクロも俺も安全だ。

死ぬよりマシだよな

俺は神様の提案に乗つた。ニコッと笑つた神様は次の提案質問をしてきた。

「その他にスキルや技能で欲しいものはあるかの?」

その質問に対しても俺はこれまで色々な事に対する羨ましく思つていた。こんなになれたら、あんなになれたらと自分の身の丈に合わないことをたくさん考えてきた。自分にできないものを考えては消去してきた。だつて俺は『出来ない子』だつたから。俺は迷うことなくこう言つた。それはとても男らしいとは呼べないようなことだ。「今まで生きてて俺のできたことは限られる…。その中でも生活が一番『出来ない子』だつた。みんなが出来るようなどを俺はできない。ずっと『出来ない子』だつた。お母さんを心配させ、お父さんを失望させ、兄貴を辱めた。出来の悪い弟を、出来の悪い息子を持つた家族だつたから。ずっとずつと、俺以外に生きる全ての人を羨んだ。普通のことが出来ないってスゲー恥ずかしいことは俺だつてわかつてた。わかつても行動できぬ奴だつた。だから、次に生まれ変われるなら『出来る子』として生まれ変わりたいつて思った。モテたいとかそういうのは持つてない訳じやないが、まず『出来る子』にならないと

見向きもされない。スキルとか技能とか言われてたくさんのことを見い浮かんだ。まさかこの俺が本当に異世界に行けるなんて思わねえから。でも、やつぱり『出来ない子』な俺には無理な話だ。だから、そこは神様に俺に必要なものを全てくれたらそれでいい。人間完璧だと逆に引かれるからな…。一部の人間には憎まれ、一部の人間には惹かれ、一部の人間には命を狙われ、一部の人間には良いように扱われるくらいなら、そうならないようなモノをくれればいい。もちろん、『なんでも出来る子』とかだったら俺は嬉しいんだけど…」

俺はもつと強欲かと思った。あれが欲しいとかこれが欲しいとか言うもんだとthoughtた。けど、違った。ちゃんと現実を見っていた。

しかしたらネガティブすぎてそれこそ引かれるタイプな言い方だつたかもしれない。それでも生まれてからずっと俺は周りと違うのを感じてた。三日坊主になるのは誰もが持つてたんだろうけど、生活まで三日坊主になるやつはそう居ない。居て引きこもりニートや自宅警備員とかだつたら、ありえるかもだが、それでも俺は自覚をしていて出来るやつに憧れもしたからこそ、ちゃんとわかってる。できなくて部屋でうなだれることは度々あつたくらいだ。それくらいには俺の心残りになつた未練。

それをもつとちゃんとしつかりと『出来る子』になれたら、俺は変われるのかな…。変われるなら、変わりたい…。現世では出来なかつたことを出来るようになりたい…。もちろん、直ぐにできるとは思えないけど、クロが俺をずっと見ててくれて直すのを手伝つてくれたら、俺は変われる気がする。もつと胸を張れる気がする。もつとちゃんと、お母さんやお父さんや兄貴に感謝や謝罪を、後ろめたい気持ちで言うのではなく堂々とした顔で言いたい。こんなにもできるようになったことや、今まで苦労をかけてごめなさいって謝ることだつてできる。そんな風に言えて、そんな風にかつこいい俺になりたい！クロと一緒にならどこまでも行ける、そんな気がするから…！

神様は俺の心を読んでフツと笑い、ボソッと「そうか…」と言つた。

それから神様は俺に最後の提案をしてきた。

「お前さんの気持ちはわかつたわい。なら、まだその辺は秘密にして

おこうかの。アツチに着いたら時に確認するといい。さて、これが最後じや。お前さんの2度目の人生の名前はどうするかの？現世の名前で行くか？それとも改めるかの？」

名前は重要だ。俺の人生が決まると言つても過言ではない。でも多分、現世とは違つて漢字で言つても通じないとと思う。だから俺はあえて。

「死んだ俺の名前は黒神遼だ。そんで異世界での俺は名前の字から取つて、ハルと呼ぶ。だから俺はハルで生きていきたい。簡単でわかりやすく呼びやすくて言いやすい。現世の頃は『遼』で『リョウ』とも読むから、みんなからリョウ、リョウって言われてきた。アレで『ハル』と読むんだが誰もそれで呼んだやつはいない。当て字みたいな感じだから読めなかつたんだろうな？だから、俺も気にしなかつたけど違和感だけはあつた。家族は『ハル』って呼ぶのに友達は『リョウ』つて呼ぶなんて、俺はどつちなんだつてなつたしな。どつちも俺だけど名前が違うだけで別人だ…。それなら漢字でいるよりカタカナでいる方がいいって思つた。それに、クロがすでに俺の事を『ハルさん』つて呼んでくれてるし、その名前にする」

そう言うと神様はクスッと笑つた。そしていつの間にかちやぶ台やらなんやらが消えていて、神様が立ち上がつた瞬間に大きな扉が開かれた。光が眩しくて腕で隠しそうになつたが、温かい風が吹いていた。

「さあ、ここからお前さんらの旅が始まる。お前さんはお前さんの果たしたい理由と目標に突つ走るが良い。自分のステータスが見たくなつたら、声に出して『ステータス』と呼べば出てくるじゃろう。そこに色々と載つておる。何があるかはお前さんの目で確かめるのじゃ。最後に言い残すことはあるかの？」

それはクロと俺に言つていた。クロは。

「ボクの2度目の人生は、ハルさんと楽しく笑い合いながら時に喧嘩することもあるかもだけど悔いのない人生にしたいと思つてます。その中には神様、ボクの初めてのお兄ちゃんでありお爺ちゃんにも感謝をします。ありがとうございました！天から見守つてください

ね！ボク達の旅路を、よろしくお願ひします！」

なんだか全部クロに言われてしまつた氣がするが、俺は俺で素直な気持ちで神様に言つた。

「最初来た時に胡散臭い神様と思つて色々言つて悪かつた…。でも、今はなんかそう思つてないつーか、カツコイイ神様だつて思つてんよ。だいたい、クロに言われちまつたけど俺達の旅路を見守つてくれ。……それと、ありがとな爺ちゃん……。またな、神様」

ボソッと感謝をして俺とクロは扉の向こうへと歩いていった。俺の耳には聞こえなかつたが、神様は一言。

「ずっと、見守つておるよ我が息子達よ…。短い間だつたが、楽しかつたぞ。達者でな、ハルとクロや」

そして扉は閉ざされ、俺達は異世界へと足を踏み入れることとなつた。

【俺達の第2の人生、まずは…】

俺は今暗い場所にいた。家族が遠ざかりその代わり新しい光が見えた。それに手を差し伸べた瞬間。

「ハルさん!!」

聞き覚えのある声に俺はハツと目が覚めた。見渡す限り巨木と言われるような木が1本生えていて、それ以外は草原だった。風が心地いい場所に俺達は居たみたいだつた。俺は起きあがりクロの頭を撫でた。まだ寝起きだつたつてこともあって、頭がまだ覚醒してない。クロと同じ目線あたりに見える。

なんか、クロの背が伸びた…??

しかも前髪がないのか景色がクリアに良く見える。頭が働いてない状態だと何も思い浮かばない。するとクロがいつの間にか俺の後ろに座り、耳元で話しかけてきた。もう一度言うが俺は、耳は弱くない。

「ハルさん、起きてください」

「ひうつ!?」

神様の所でされた声。つまり今、大人なクロ。目と頭が一気に覚めた。横を見るとニコッと笑ったクロがそこに居た。そして大人びた顔つきだつた。顔真っ赤にする俺を見て、クスッと笑つたクロ。

「起きましたか？」

「お、おおお起きた!! 起きたからつ!! も、ももも戻つてくれ…つ、クロお!!」

ただただびっくりしただけ。そう俺はただびっくりしただけだ。日が当たつてるからその暑さのせいで顔が赤いだけ。やましいことはひとつもない。はずだ!

クロはまた戻つた。煙は最小限に抑えて変わらう。そこは神様の配慮だろう。でもこれは少し不便な気もする。誰に見られるかわからないのにこれでいいのかと。うーんと悩んだ末に俺はあることに気がついた。俺の声はさほど生きてた頃の声のままだ。それは

問題ではない、ただ俺の顔や背格好があまりにも見えすぎてクロと変わらない。それが不思議に思えた。

確かに、神様は『ステータス』って言えば出るつて：

口で言う前に出てきた。ビックリしたがこれは便利だ。言葉にするのではなく頭の中で言えばいいのだ。変に思われなくて済む。開くとズワッと画面が広がった。見やすいが人に見られないのか心配だ。

それとも、いろんな異世界モノの漫画を見てきたがご都合主義でこの画面は見えないとあるのか…？

とりあえずプロファイールを見るにした。

「えーっと、何々…？名前はハル、年齢15歳、性別男の娘、身長155cm、職業は冒険者メインの上位鑑定士サブ、種族猫獣人と……」

ん？身長と種族が…あれれ??しかも男の娘って…

この際、性別はもうなんか神様の趣味として片付けた俺は一度立ち上がった。クロもつられて立ち上がる。背比べをしてみた。少し俺の方が大きいかもしねないが、微妙な大きさだった。クロは猫だったから猫獣人なのもうなずける。問題は俺だ。

「クロ、大人になつてみろ」

「はい、ハルさん」

言われた通り大人になるクロ。煙最小限演出はどうにかならないものかと思いつつ、俺はクロを見上げた。

お、おつきい：

クロは俺を持ち上げた。ビックリして少し暴れてしまつたが、抱きしめられた時には大人しくなつていた。そしてとても居心地が良い。夜一緒に寝るつてなつたら、日替わりでこういうのもありかもなあ

脱線しそうになつたが、とりあえず身長の件は解決。次は俺の種族だ。

「クロ」

「はい、なんでしょう？」

大人の状態での敬う姿勢なクロはとてつもなくかっこよかつた。コロツと惚れそうになる。

今は心頭滅却!!

「お前がして俺の見た目を教えてくれるか？」

クロは一度俺を下ろした。それから舐めるように見つめ、答えを出した。

「ハルさんがここに来る前にあつた人間の耳はなく、代わりに僕とお揃いの猫耳と尻尾が生えていますよ。多分、人間よりの猫獣人だと思します。人によつては動物よりの人間もいると思いますから。それからボクと同じでオツドアイです。左が紫で右が空色です」

クロは丁寧に教えてくれた。猫獣人もそつだが、俺の憧れだつたオツドアイと聞いて心の中で興奮した。

「なるほどな、ありがとう。それと戻つていいぞ」

心臓に悪いからな…

「はい」

そして元に戻つた。また俺はステータスを見た。他に何かないかと探る。そういうえばスキルや技能はどうしているのか、気になつた。まずは技能から。

「こ、これは…!?」

「どうしたんですか？ハルさん」

「俺が今までできないと思つてたことが、ここに載つてる…！」

「どれどれ…？」

料理やらの家事全般のレベルがMAX、冒險者なので武器使用の場合でも持てばスキルも同時にレベルMAX。上位鑑定士なので、見る目のレベルもMAX。体力やその他もろもろ全ての数値がMAXだ。魔力と書かれた文字に気になつて、タップした。すると説明書きがあつて、そこに書いてあるには。

『魔力とはこの世界で最も必要なものである。魔法を使うにしても剣技に使うにしても、スキルを使う上で重要視されている。一定以上使うと、魔力切れで意識がもうろうとする。一定量使うと、頭痛を引き起こす。頭痛がしたら予兆である。目安とも言う。魔力を使う時は

十分に気をつけることをオススメする』

と、書かれていた。わかりやすい説明で頭の整理がしやすかつた。

そしてあることも気がついた。

『まず俺の魔力量ついくつなんだ??

魔力が見れるとしたらプロフィール画面だろう。しかしどこにも魔力量が書いてない。どこを見たらいいのかわからない。俺が首をかしげていると。

「スキル画面にはないのでですかね?」

「スキル画面……それだ!!」

俺は直ぐに技能の横にあつたスキル画面にした。そしたら案の定、魔力量が書かれていた。しかし驚くべき数値だつた。

「…、これは……」

「凄いですね…?」

俺もクロも驚いている。そこに書かれている数字は測れない状態になつてゐる。

「一、十、百、千、万…………一億!」

「一とゼロが8個あつて、思わず尻もちついた。
「んじゃあ…レベルは?」

この世界がレベルで表示されるなら、俺にもあるはずだ。レベルならプロフィールにあるだろうと思い、最初の画面に戻す。そして魔力と同じくらい俺は驚いた。

「+99999…………つてことは一万以上のレベル!」

俺最強にしてチート無双じやん!!やつばつ!!

このレベルならさつきのレベルもうなずける。技能の所にあつたコミュニケーションは普通だつた。まあ、流暢に喋る俺もキモイからな。モテはするだろうが、それは俺だけ俺じゃない。クロといふ時はだけでいい。あらかた俺のことは調べた。次はクロだ。俺はプロフィールのどこかにクロが見れる場所を探した。

「どこにもないな…」

「何をお探しで??」

「クロのプロフィールを」

「ああそれなら、こちらに」

そう言つてクロも「ステータス」と口にして表示させた。俺にも見えるということは他の人間も見れるんじやないか疑惑が出てくる。ちょっと不安になつた。

「あ、最初に言うの忘れましたがこのステータス機能はボクとハルさんだけですよ。魔力探知機なるものがこの世界にあるらしいですが、魔力探知機のみなので、このステータスが見られるることは無いそうです。ハルさんが寝てる時に神様から聞きました」

寝てる時、つまり目覚める前つてことだ。そんな話をしてたのか、俺が寝てる時に。

「なので、仲間であつてもボクとハルさんのみが見れるみたいです。そこは共有みたいですよ。ボクとしてはお揃いのものが増えるのは嬉しいので、ハルさんも同じならもつと嬉しいです♪」

そう言われると神様に対しても悪態よりも、クロの可愛さに負け、今回はやめた。とりあえず先に進めないので、クロのプロフィールも見てみることにした。

「名前はクロ、性別は男の子兼男性、年齢10歳兼22歳、身長150cm兼170cm、職業回復系サポート、種族猫獣人、と。兼多くね??」

そりやあ変わるからつてのもあるかもだけど、それにしたつて……考えても仕方ないので職業に目を向ける。

「回復系サポートって言うと、何を意味すんだ??」

「回復系は多分、魔法もそうですが調合もだと思ひます。ハルさんのような目利きではないので、ハルさんの目利きが重要だと思ひますが毒消しやマヒ消し、あとは……眠気防止などだと思います」

「なくてはならない存在じゃないか！」

魔法は魔力量によるが、調合は俺のを見る限りではなかつた。回復系というより戦闘系だつたのかもしれない。なのに鑑定士つてつて思うが、それは伏せよう。

「サポートだとなんだ？」

「サポートは主にハルさんの身の回りのお世話だと思います。もちろ

ん、自分でやらせるためのサポートですが、それ以外もあるんじやないかと思います。例えばメンタルケアとかでしようか」

なるほどな。それは嬉しい話じゃないか

ちょっと想像してしまったが大人の方を想像した瞬間、顔を横に振った。大人のクロは考えたらいいけない。変なスイッチ入りそうになるというかよくわからない扉を開きそうになつた。

俺は違う、俺は違う、俺は違う!!

クロは俺を見てキヨトンとしていたが、俺は深呼吸をしてからまたクロのプロファイルを見た。次に見たのは俺と同じ手順で技能だ。「癒しMAX……は、ヤベーな…。さすがといえばさすがだけさ…。あとは情報収集?」

情報収集ってことは聞き込みってことか??

「この部分だけ切り取ると、聞き込みや張り込みも入るかもです。張り込みは止められそうですが、聞き込みは街の人についてことだと思います。ハルさんの聞にくいことや言いづらいことを、ボクが言うとかでしようか。特に聞かない方がいいってモノは空氣を読んで聞かないようにします。ハルさんが聞いて欲しいと言うことだけ聞きます。その方が安心でしょ?」

「そ、そうだな! そうしてくれ」

そこら辺はちゃんと見てて良かつた…、俺だけだつたりクロがやんちやだと色々問題が起きてたかもだし…

他も見てみる。

「ん?? 変身??」

何かに変身するのか??

「あつ、多分これは動物を例えるなら狐や狸とか『変化』するじゃないですか。それだと思います。ボクの場合は3つあります。1つは今 の姿、2つ目は大人の姿、3つ目は猫の姿です。こんな感じに!」
『ボンッ』という音と共に猫の姿になつたクロ。

「こんな感じで変われるってことだと思います!」

「猫が喋つた!」

「何を言つてるんですか! 猫獣人なんだから当たり前ですし、ハルさ

んは変化できなくてもボクの言葉は分かりますよ！それともにやーにやー言つてた方が良いですか？それならボクは二度と話しません！」

「あっ、違うクロ！そういう事じゃなくてな！？ただびっくりしただけだから！クロの動物姿は初めてみるからびっくりしてるんだ！！嫌じやないから、話さないとか言わないでくれよ……っ」

今にも泣きそうな俺にそっぽ向いてたクロが人間の10歳に戻つて、ため息を吐きながら頭を撫でた。

俺、スゲー今子供っぽくなつてんな…

体は子供なので間違つてないが、俺は15歳。クロは10歳だ。そう考えると俺の方が兄なのにこの状況。

情けねえな……

気を取り直してまだ技能に何かあるか見てみる。『暗視』と書かれた名前があつた。

これはつまり、夜の暗い場所とかを見る時に周りがよく見えるとかいうアレのことだよな??

その下には『敏感性聴覚』と書かれていた。それはよく分からなかつたので、タップすると。

『敏感性聴覚とは、過敏反応に該当するもの。人の声や動物の鳴き声に関わらず小さな音も金属音も大きな音となると、過敏反応してしまう技能。他にもその影響で触られると体が麻痺したかのように、動けなくなる危険性がある。耳を隠すものがあるとオススメ』

神様、なんつーもんをクロに与えてやがる…

これも『なんでも出来る』呪いか何かと思つた。ある意味弱点と言えば弱点だ。これをされると再起不能になり動けなくなつて、さらには戦闘不能にも成りかねないというものだ。クロには何か似合う頭巾みたいなのをつけさせた方がいいかも知れない。

気にならないような頭巾なんてあんのか…??

まあ、この世界にないなら作つてやればいい。クロのためなら自分のことよりもやろうとする俺なら。自分に対しても無頓着だが、俺の大切なクロになら疎かになんて絶対にしない自信がある。

もしこの世界にないなら裁縫頑張ってみるか。一応家事全般できるつてあるし

俺の想像通りのものが出来ればいいが、とりあえず他にめぼしいものが無いようなのでスキルを見た。

「回復系魔法は一通りあるな…。上位回復系もある。職業なだけあるな。それ以外は調合の方がわかりやすいかもしれん…」

「ポイズンクリアって、つまり毒消しつて意味だよな？普通にカタ力ナジやなくて日本語でも良くね？分かりづらいし…、麻痺なんてマヒクリーンとか…。いやいや、意味が違ってくるぞ？さては、にわか神様だな…。異世界についてあんまり詳しくないってやつ！…あんまり言うと良くないこと起きそっだから止めよう…」

それから『子守唄』というスキルがあった。異世界モノのどのラノベにもなかつたスキル。これをタップすると、他と同じように説明書きが出た。

『子守唄とは、敵全体への眠気攻撃。戦闘時で味方への効果は無効。条件が合うと味方にも効果が発揮するので戦闘時には注意。戦闘以外の使い道は味方へのメンタルケアの際、癒し効果がある』

と書かれていた。歌の種類は2つあつた。1つは戦闘、もう1つは癒しの歌だ。

【死の眠り—デス・スリープ—】

【癒しの眠り—ヒール・スリープ—】

とんでもなく中二臭い名前。といふかここだけ中二病チックだ。でもわかりやすい。

少しは要素をとか思つたのかな、神様は…

俺の見ていた異世界モノもだいたいが中二病セリフ待つたナシだから、耐性はある。どちらかと言うとそれを読んでたしそつちの方が見慣れてる。

漢字とか当て字とかたくさん並べられてるけど、まんまの意味とかよくあつたし。今更つて感じだしな

ちよつと親近感を湧きつつ、他にクロのスキルや技能にめぼしいものが見当たらなかつたので終わつた。時間がわからないのは少し不

便ではあるが仕方ない。

「なあ、クロ」

「はい、ハルさん」

俺は次にクロに俺からの希望を伝えた。それは。

「敬語じやなくてタメ口でいいぞ？なんかむず痒い…」

それは話し方の提案だ。俺としては今の所、歳とか身長とかを考えると俺の方が上だが、大人のクロはそうじやない。俺は変わらないのでどう足搔いても兄にはなれない。そんな状態で敬語にされると変な感じがする。せめて区別だけはつけて欲しいのが本音だ。

「でも、ボクはずつとハルさんにタメ口で考えたことないですよ？」

「それはそうかもしけんが、俺がなんだか嫌なんだ…。それに、仮に今姿では敬語でいたいならそれは許す。歳や身長的に俺の方が上だし弟として見ることが出来る。まあ、百歩譲つてつて話だ…。だが、大人のクロはどうだ？年上でも敬語を使うやつはいるかもしけんが、俺の方が逆に敬語にならねえと示しがつかん。タメ口ならそういう兄弟関係なんだと変に思われなくて済む。なんだかお前が執事か何かになつたみたいで、ちょっと……寂しいから……」

言い訳では無いが、だんだん恥ずかしくなったのか最後は声が小さくなりボソッと話した。クロは俺を見て折れてくれたのかため息とともに洟々と言つた感じで了承してくれた。それから頭を撫でられた。

クロはしつかりしてゐからな…。俺の方が子供っぽくなつちまうのもしかたねえんだけど…

でも関係的には本当だ。俺は15歳だ。クロは今の姿なら10歳でも通用するが、大人のクロは22歳。つまり身長も年齢もクロの方が上。兄的存在なのに敬語だと、いろいろ語弊を産む。目立ちたくないって理由じやないが、違う意味で注目を浴びそうで困る。現世と違つてここでは法律とか関係ないかもだが、俺はそこで生きてきた人間。人の目は気になつてしまうものだ。

なにより、奴隸みたいでなんか嫌だ…。

「猫の姿と今の姿は敬語でいい。が、大人のクロの時だけタメ口な？」

違和感しかねえから…」

「……、わかつたよ、ハルさん…。まだ慣れないけど、少しづつ直すね?」

「おう! ありがとな、クロ!」

俺は嬉しそうにクロを見た。クロの目から俺はどう写っているのか、なんだかクロの顔が赤い。

「クロ? どうした? 熱か??」

「ん、ううん! 違うよ! ……ハルさん、可愛い……」

最後の方は小さくて聞き取れなかつた。その辺は技能としてだと、クロの方が長けている。聞こえなかつたことを聞いても教えてはくれないだろう。

俺のスキルとかの詳しく述べは武器を持った時みたいだし、その辺はどこかの街に行かねえと…

そういえば、あたりを見ると夕方になつていた。初歩中の初歩を俺は忘れていた。ここは異世界で現世じやない、飯が自動的に出てくるような場所じやない。というか宿屋とかはありえるかも知れないが、ここは草原。街ですらないわけだ。今晚の飯がない。携帯食か何かないか『アイテム』と頭の中で言う。

本当に頭の中で言う機能があるのは楽だよな…

とりあえず神様から多分、一通りもらつていてるであろうと見たら武器や防具もその中に入つっていた。俺は思わずツッコミをしそうになつたが、とりあえず心を沈める。武器や防具のことは今飯のことを考へてる俺としては、後回し。その中には『料理』は入つてなかつた。が、代わりに材料が入つていた。運良くフライパンとか火を使わない調理器具やらがあつたので、それを使って作ることにした。

えつと……、パンとリンゴと魚に肉……色々入つてるけど、その中であつて良かつたって思うのはこの世界でもジャムがあることだな

ジャムならパンに付けて食べれる。たくさんの飯は無くても腹には溜まる。それをクロの分も作つてやる。クロにとつては物珍しいかもしけないが、人間になつた以上は食べて慣れてもらう。

⋮

ぬいぐるみだつたら死なないが、弱肉強食の世界だからな。慣れてもらわんといかな

クロには焼くことが出来ないので、普通にイチゴジャムを塗つて渡した。自分のも焼けないので、ブルーベリージャムを塗つた。まずクロの反応を見た。クロは初めて見る物にキヨトンとしていた。恐る恐る食べたクロは目を丸くして顔を赤くしながら。

「美味しい！」

と言つてくれた。焼いた方がもつと美味しいがここは草原。焼くと火事になるので焼く事が出来ないが、これでも食べれる。反応を見た所で俺も食べる。

「うん、いつも食べてる味だな」

「ハルさんはいつも、こんな美味しいものを食べているの？ボクは見てるだけだつたし、そうなのかな？つて…」

「そうだな、人間なら誰でも食べてる料理だよ」

「そつか。じゃあボクは今、ハルさんから初めてを体験してるだね！」『初めて』と聞くとなんだか嬉しい。やましいことではないが、俺の大切なクロからの言葉は、他の仲間がいてもクロに勝るものはないと思う。あとりんごを剥いて木の皿に入れてあげて、クロの前に差し出す。

「これは、りんご？」

「そうだよ、よく俺が食べることあるだろ？シャリシャリしてて美味しいんだ！」

クロが言われた通りパクツと一口。甘い所に当たったのか頬を持ち上げて美味しそうに食べる。なんだかホッコリする。

「ごちそうさま。よし、それ食べたらテントを張ろう。夜寝る時のためにやつておくとよく眠れるからな。俺はテントを作り始めてるから食べ終えたら手伝ってくれ」

「うん！わかつた！」

「無理に詰め込むなよ？喉に詰まるからな」

「はーい」

俺は食べ終えたものを『アイテム』にしまい、代わりにテントグツ

ズを出した。ランプのようなものもあったので、それも一緒に置くと表示された。

「魔除けランプ？」

魔除けランプってことは、モンスターとかを来させないようにするためのヤツ、つてことだよな??

とりあえずテントを作りながら、魔除けランプの点け方を見た。そこにクロも来たのでテントの作り方を指示しながら、俺はランプの方を見た。

えっと? これは火を使うのか…。うーん、この風だと消されそうだよな…。まあ、なんとか頑張るか…

『アイテム』からマッチを取り出しラップの中に火を灯して、カポツと蓋を占める。それを3つ作つた。風に煽られて火が消えることはなかつたので、スムーズに出来た。あとはこれをテントの三方向に置くだけ。

「ハルさん、テント出来たよ!」

「おっ、グッドタイミングだな! それじゃあこの1個をこのワイヤーと一緒にあそこの端に付けて欲しい」

「わかつた!」

クロに1個持たせて、俺はクロと同じようにワイヤーを使って固定する。全部付け終えてから寝袋も『アイテム』から出してテントの中に入れる。それからクロの食べた物を片付けて、テントの中に入つた。

「とりあえず、魔除けランプの説明書きを読むか

「何かあるの?」

「いや、どのくらい使えるもんなのかわからんしな。調べておくことは必要だろ? 何があるかわからないしな。どのくらいの範囲まで可能なのかも知つておいていいと思うし。俺達を守る役目があるみたいだしな」

「なるほど。あつ、でも…」

「うん? どうした?」

「盗られたりしないのかな…つて」

「その辺も見とこう」

「うん！」

俺達は『アイテム』の魔除けランプについての説明書きを見た。そこに書いてあつたのは。

『魔除けランプとは、自分に對して魔になるものから回避するために使うもの。守る対象である人間に、敵と思われる魔物から守る役割を持つランプ。通常のランプは明かりを灯すもので、魔除けはない。魔除けという付与を行うと、直径10m範囲には入つてこない。また、盗賊や海賊と言つた人間を襲う者からも守る』

付与…つて普通の人間でもできるのか??

付与だけを鑑定すると。

『付与とは、鍛冶屋等の武器防具を売る者になら備わつてる者もいるが、それは神の加護で与えられている者以外は使えない。『神の加護』を持つ者のみ、使えるエンチャント技能』

神つてあの神様だよな?スゲーな:

そういうば、俺の所にもなんかそれらしいのあつたような、なかつたような……

なんとなく異世界モノを読んでたりすると、見落とすことがある。俺はもう一度自分の『ステータス』を見て、自分の技能をチェックする。そこには『神の加護』と『鑑定眼』、『偽装』というものがあつた。『神の加護』はさつきのエンチャント系以外に何かあるのか?

『神の加護とは、付与魔法のこと。完全防御付与や、完全治癒付与、全状態異常完全遮断etc……等の該当に当てはまる。他にも時と状況と場所と敵によつては、全ての攻撃を無効にすることもできる』な、なんとチートな技能だつたんだ!!なんとなくよくある『神の加護』かなつて思つたら、ちょっと違つたチートだつた!!

次に『鑑定眼』を見た。

『鑑定眼とは、鑑定士でも上位の者にしか持ち合わせれない技能。神に与えられた者のみが持ちうる技能。通常の鑑定士は与えられない技能。通常の鑑定士と上位鑑定士では、物の価値観が完全に異なる。見極める能力が優れた眼』

うわ…、これもヤバい……

最後に『偽装』を見た。

『偽装』とは、主に自分の身分を偽ること。体格や年齢、性別、職業等の相手に対して適した身分に偽ることで、自分の身を守ることが出来る。またこの技能を使っても、元に戻るので何度も使える』

「おお、これはこれで使えそう……！」

俺の見た目的にも『俺』ではなく、『僕』が適任だと思う。神様がショタコンだつてことが言いたいなんて思つてないが、そういう体格だから『俺』と使うのはなんだか変な感じだ。

俺自身、身の丈に合つてない体格してるにも関わらず一人称が変だと違和感を感じるからな

クロはすでに疲れて眠っている。朝が来たらまたクロに相談しそう。報連相は大事だから。

「おやすみ、クロ」

「むにゃ……おやしゅみ、……ハルしやん……」

可愛い、尊い。そう思いながらクロをギュッと抱きしめて俺も眠つた。今日一日なにかしてた訳じやないが、色々ありすぎて頭が疲れたのだ。休息しないと頭がパンクしそうだつたのもある。

今夜はいい夢を見れますように……

【2日目、街に向かうがそこには…】

夢見ることなく朝を迎えた。俺は起き上がり背を伸ばした。なんだかスッキリ眠れたし、スッキリ起きた。これもクロの抱き枕があつたおかげかもしない。特別な存在がいるだけでポカポカするからだ。

クロは、……まだ寝てるな。起こすのも悪いし朝食の用意をしよう音を立てないようにソッと起きて、『アイテム』からまた火を使わない食材を取り出した。

とは言つても昨日食べたパンのヤツだけど…

俺としてはもう少し何か手を加えたい。しかし、火や電気で使うことが多いので充実してから考へることにした。やれることと言えば、昨日とはちょっと違うジャムで塗る。それをクッキーのチョコとプレーンのよう斜めに塗るという。

これもまた物によつて相性がいいんだよな♪

俺のは昨日のブルーベリージャムと今日はマーマレードを組み合わせた。クロには昨日のイチゴジャムと今日はブルーベリージャムを組み合わせる。美味しいって言つてもらえるかはわからないが、これも焼くと美味しい味が出る。食べさせれないのが歯がゆい。

まあ、今日は支度したら街に向かつてみよう。ここにずっと居ても不便なだけだからな…

とりあえずクロが起きてくるまで、朝食の用意を済ませ『地図』を見る。『地図』と頭の中で指示すると、ババンツと目の前に表示された。非常に近い。

もう少し見やすくしてくれ…

そう思うと少し見やすい位置にススッと動いた。神様の悪戯に違いないと思いつつ、ここから近い街を探した。ここからだとずつと木々が生い茂つて見えないので、範囲を広げてみた。

この辺りには街がないけど、村はあるみたいだな

漫画みたいにはいかないようだ。漫画なら少し歩くと街が見える。
この世界は現実そのもので、そう簡単には思うように進まない。

しようがない、街に行くための経由で村に寄つてそこから近い街を紹介してもらおう

という計画を立てた所で、クロが起きてきた。寝起きなのか、目がしょぼしょぼしてて可愛い。欠伸をしながら俺の横にちょこんと座つた。

尊き…

俺はクロの目の前に、用意した飯を置いた。クロのお腹が鳴つたの合図に、クロはパンを掴んでパクッと食べた。目を見開きはむはむ食べ始めた。いい食いつぶりだなと思いつつ俺も、手を合わせて。

「いただきます」

と言つた。クロはそれを聞いてハツとしたのか、パンを置いて。

「いたらきましゅ」

口の中にパンが入つていたので、呂律が回らず噛んだような言い方で挨拶してまた再開。俺も言つてからパクッと食べて、美味しく頂いた。しばらくしてデザートも食べた所で、今後の方針をクロと相談した。

「クロ」

「何? ハルさん」

「これから街に向かおうと思うんだけど」

「街?」

「ああ。でもこの辺りに街が見当たらないから、近くに村があるんだ。だからそこを経由して街に向かおうと思う。そこで、その村に行くのはいいんだが俺の体格と言葉遣いが一致しないから少し偽装しようと思うんだけど、どうかと思つてな?」

「街に行くのはいい提案だと思う。でもなんで偽装? ハルさんはそのままでいいと思うよ?」

まあ、なんだけどな

俺のこだわりによるものがあるからだが、そこは伏せて話を進め
る。

「生きてきた現世の俺なら、違和感なくこのままでもいいって思つてた。だがここに来て童顔でお前と同じくらいなのに、声が低くて一人称が俺つて違和感しかしねえから、見合つたもんが一番変に思われなくて済む。その方がギャップ好きな奴により、偏見を持つ人間の方が多い所なら共通な声の方が楽だろ？まあ、慣れないタメ口をしてもらつてるからこれにも慣れろとは言わないが、その方が助かる」

クロはうーんと言いながら考えた。それでもやっぱり違和感が残るようで、首をかしげていた。俺はクロの言葉を待つた。

「考えすぎつてことはないかな??そこまで考えなくても気にする人はいないと思うよ??まず1回、村に行つた時にやつてみてそのままではやつてみて、違和感を感じられた時にやつたらスムーズじゃないかな？」

確かにクロの意見も理解出来る。俺の焦りもあつたかもしれない。

1度そのやり方をしてから考えてもいいかもしれない。『偽装』は何もその時にする必要はないわけで、俺はクロの言葉に賛成した。

「なら、とりあえず村に向かつてみよう。地図を見てみたが名前が載つてないところだつたから、聞かなきやわからないが言つて見ればわかる」

「うん、じゃあ準備しよう！」

とりあえずこのままの服装だと、色々と変に思われる所以でクロと同じように服装を変えようと思つた。『装備』と言ふと、多分服装やらも変えれる画面だと思うが見る限りコスプレにしか見えない。とりあえず、無難にクロと同じように村人っぽい服装をした。職業系は後でも変えられると思って、旅人のようにマントを付けた。そこにあの魔除けランプを装備する。クロにもマントを付けてあげて、旅人に見えるようにした。いかにもつて感じでなんだかワクワクする。

一応、これで安心して村にも行けるし街にも行ける。準備万端だな！

『地図』を見ながら村がある方に足を進ませた。俺たちの印は緑色の丸。村は資格で白、こちら辺にモンスターは生息していないみたいだが、モンスターは赤らしい。しかし、その赤色の丸はレベル的には多

分上級なんじやないかと思う。俺の予想はだが。

その辺も聞かないとわからんよなあ：

しばらく地図上の道案内を見ながら歩いていると、馬車が1台止まっていた。しかし何やら大騒ぎをしているみたいだつた。俺達はとりあえず茂みの中に隠れながら、ゆっくり近づいた。回り道するようだ。

「……!!」

「……!?」

まだ遠いのかもう少し近くに行くとクロに止められた。これくらいの近くならクロの耳に届くみたいだ。俺の耳にはまだ会話すら聞こえないが。やいのやいの騒いでるような感じのだけはわかるくらい微小。

「なんだか、揉めてるみたい…。それに盗賊っぽい人達が村人を襲つてゐみたいだよ?」

「ここからだと狙うにはもう少し近づかないと難しいか…。何か『アイテム』にあるかな??」

『アイテム』を一通り見て、めぼしいものを発見した。『投擲』に使えそうな物だ。これは忍者がアサシンなんかが持つスキル。それを使うことにした。

これは多分、待ちでないと無きそうなヤツだけど1本使ってみるか俺はダーツでやるあの矢を使って、デカブツを狙い定めて思いつきり投げた。すると思いのほか早くてのを貫いた。俺はとりあえずそこにいる何人かをダーツの矢で倒していく、クロと近くまで行つた。グロテスクな状態だつたので、クロの目を隠しながら馬車の人にはづいた。するとビクビク震える村人は俺を見て、助けて欲しいのか服を掴まれた。

「ど、とりあえずここから離れましょう? 何があるかわかりませんしね?」

初対面なのでとりあえず敬語で話した。すると馬車の村人は俺達を乗せて、見渡しのいい所まで走つてくれた。話すことが出来ないので多分、目の前で死んだ盗賊を見てしまつたからかもしれない。

まあ、そりやあそудよな…

俺でも現実世界で見たら卒倒する。異世界だからこんなことは慣れなきやいけないことだから大丈夫だが、クロにはアレは見せられないとほどだつた。俺は加減をしてない自覚があるので、自業自得である。

ああいう盗賊に宝とか持つてそうだけど、今はそんなこと言つてゐる場合じやない

今ここを離れたらこの村人が倒れそだつたから。しばらくして林を抜けるとだだつ広い所に来た。やつと村人も落ち着いたのか話し出した。

「……オラは、この近くの村に住む住民だ。さつきの人らに色々持つていかれそうになつたり、殴られそうになつた所を助けられただよ。中には貴重なモンまであつて、それは絶対に取られたくなかつただよ。ありがてえ、おめえさんら」

スゲーなまつてる…。わからぬ言い方はしてないから、会話になるけど…：

とりあえずクロの目から手を離し、クロが慣れるまで話を聞くことにした。村から街へ行くための行き方や、盗賊に何を取られそだつたのか等、教えて貰つた。村人の言葉はこうだつた。

『街つていうか、王国には通行証が必要で持つてない者は入れないので、近くの村に通行証を作つてもらう必要がある』

それから。

『盗賊に盗られそうになつたのは、貴重な世界で1つしかないアイテム収納バックや、鉱石、本、食材等が荷台に入れていた』

との事だつた。俺が試しにそのアイテム収納バックを貰えないかと言うと、その村人は助けてもらつた恩返しに渡そうと思つてたと言つてくれた。

なんだか、断れないイベント話の流れがあり御託頂いた。それをクロに渡す。

「これはクロが使いな」

「いいの？」

「ああ、俺は俺で持つてるからお前はお前で持つてた方がいい」

「うん、ありがとう！」

そう言つてバツクをクロの肩にかけてあげた。するとさつきまで大きさから、クロの体格に合わせた大きさに変わつた。俺がビックリしてると、村人がドヤ顔して教えてくれた。

初めて見るわけじゃないが、目の前で見ると圧巻だ…

「それはな！この世にたつた一人しかおらん大賢者様がお作りになられた魔法のカバンだ！なんでも入つて何個でも収納できて、…とにかく収納出来る代物だ！普通のカバンなら大きさによつてでもそんなに入らんが、そのカバンはたとえ魔物でも入つちまうと豪語するほどでな！魔物を入れるヤツなんて見たことたねえが、俗説によるとそういうことをしてた時もあるつて話だ！それが運良くあんたらに回つてきたつてことだな、大賢者様に感謝せんとな！」

これは思わぬ収穫だ。助けた恩とダメ元で聞いた甲斐があつた。貰えるというお約束付きなところは本当にいいところだも思う。

現実世界じやありえないしな

しばらくして村に着いた。村の検問所で荷台に乗つてた俺達は、事情を話して中に入れてもらつた。それから1番最初に、通行証を作つてもらうために受付場所に案内してもらつた。ギルド云々は王国以外に、大きい村とかならあつたりするらしい。重要視されるギルドのみ、王国で管理されてるらしい。

傭兵系は村で充分なのかもな…

案内してもらつたところは『冒険者ギルド』とまんまだつた。中に入ると人は少ないがそれでも、冒険者と名乗れる程にはいた。みんな各自のことをしていた。俺達は真っ直ぐに向かい受付のお姉さんに声をかけた。もちろん、敬語で。

敬語つて便利だよなあ…

「あのーすみません。通行証が欲しいんですけど、どうしたらいいか教えてくれませんか？」

そう言うと親切に教えてくれた。

「通行証ですね？通行証というのは冒険ギルドや商人ギルド、料理ギ

ルド、薬師ギルド等のご自分の職業にあつた所で行つております。冒険者だとしても、職業で通行証が違いますので注意が必要なんです。お二方は見た所、旅人のようですがよろしければ教えていだけませんか?」

そんなにあるのか、それをここで受け持つてることか??それとも俺だけしかできないのか…??

「俺は冒険者です。主に戦闘特化した感じです。こつちは」

「えつと、ボクも冒険者です。主に回復魔法や調合ができます」

クロがそう言うと今までワイワイ話してた周りが、一斉に静まり返つた。どこを聞いてかは、こここの代表として受付のお姉さんが教えてくれた。

まあ、俺のはありふれてるからな…

「調合ができるですか!?’

「えつと……」

「チート系はなしで話してやれ」

小声でクロに伝えると頷いてから説明した。

「魔法でも使えたりはするんですが、そつちはヒールとかの回復のみで。調合は毒消しだつたり睡眠防止、麻痺直し…………えつとつまり、じよ、状態異常系を治す薬の調合ができます」

考えながら質問に答えるクロ。ちゃんと説明ができたクロの頭を撫でると、はにかんだ顔で嬉しそうに撫でられた。すると受付のお姉さんが先走るように話し出した。

「それなら薬師ギルドがいいと思います。冒険者として動くことが出来なくなってしまいますぐ、他のパーティの方をサポートすることも出来ますし、なんでしたらこのギルド専用回復調合師になつてくれても……」

俺はそれを聞いて。

「あの」

「あ、はい」

俺が声をかけるとあつさりした声で返した。クロに話しかけさせてみた。

「あ、あの…」

「はい…ないでしようか！」

クロが言うと俺の時と打つて変わつて元気な声だ。つまり『調合』はそれだけこの世界では、重要視されていることになる。さらに、話しかけたのはこっちなのに何かに気づいたのかまた話し出した。

「あ!!あなたの持つてるそれは、かの大賢者様がお作りになられたと言われる魔法のバツク、通称アイテム収納バツクではありませんか!!調合をする方にはあつて損はないと言われる、世界で一つしかないと言われる代物。国宝級のものじやないですか!!これをどこで!?」

これはクロに聞いていた。クロは俺を見て俺は頷いた。

「えつと、ボクがしたわけじゃないことを予め言つておきますが、馬車を使つてた村人さんを何人かの盗賊さん達が襲つてたので、倒した時にそのお礼としてもらいました」

「そうなんですね！素晴らしいです！それで、誰が倒したのですか？」
「えつと、ボクの隣にいるハルさんです」

「ハルさん??」

前のめりに話してた受付のお姉さんは『ハルさん』という俺の名前を聞いた瞬間、キヨロキヨロし始めた。周りは頭を振つて、そこに居るだろと指を刺した。受付のお姉さんはなんだか期待外れという顔で言つた。

「そう……なんですね。すごいですね。はい。まあでも、そんな所は重要じゃないのでいいです。そんなことよりも調合もできて、魔法のバツクを持つてる方が重要視ですよ！素晴らしいです!!ようこそ、冒険者ギルドへ!!」

あくまで俺は眼中に無い受付のお姉さん。最初こそはいい人かと思つたが、検討ハズレのようだ。俺は。

「クロ、お前だけでもここにどうろ」

「お姉さん」

「あ、はい！なんでしょう？」

俺の言葉を遮つたクロ。受付のお姉さんは呼ばれて返事をした、すごく元気に。

「ボクを褒めてくれるのは嬉しいと思つてます。それはありがとうございます。だけど、一つお姉さんに対しても思つことがあります」

「はい？」

受付のお姉さんはキヨトンとした顔でクロを見る。俺は少しクロが怖いと感じた。悪寒というか、これから何を言うのかハラハラしていると。

「お姉さん。ボクは回復系のサポートしかできることはあります。それに調合するのだつて、ただ作るだけじゃ意味がありません。目利きだつて必要です。ボクには調合が出来ても目利きまでの技能は持つてません。その品が良いか悪いかがわからんんです。でもボクの隣にいるハルさんにはそれができます。ハルさん無しではボクは無力なんです。なので、ボクを褒めるより村人さんを助けたことや盗賊を倒したハルさんを褒めるべきです。魔法のバツクが最高級で国宝品だつていうのは間違いないんでしようけど。ボクのパートナーでありパートナーであり相棒は、ハルさんだけなんです。ハルさん以外と組む気はありませんし、こここの専属師になる気もありません。ボクはあくまで、ハルさんと共に冒険者です。それを履き違えないでくれますか？それと、人を見た目で判断する人は軽蔑します。ここに入れば本当に利益になるんでしょうけど、お姉さんがそういう人ならボクはここで登録することを拒否します。あと、ボク達の身長はあまり大差ないですけどハルさんの方が上ですし歳も上です。こんな体格で疑うのも無理はありませんが。もちろん、お姉さんよりは下ですけどここで通行証を貰うよりも他に行つた方がいいと判断しました。それと、このギルドの品が損なう態度は改めた方が良いと、アドバイスしておきます。それでは、これで。さよなら」

クロが受付のお姉さんに向かつてそう言いきつて、俺の手を引いてギルドを立ち去つた。ギルド内にいる人間らはポカーンとした顔で、立ち尽くしてたがしばらくしてギャーギャーと騒ぎ出した。そんなことを知らない俺達はさつきの馬車に乗つてた村人に会つた。

「おんや？ オメえさんら通行証は貰えたんか？」

「いえ、貰いませんでした」

「貰わんと王国には入れんぞ??」

「こここのギルドは品定めするような所みたいで、あなたを守ってくれたハルさんのことを探めず、何もしてないボクやこのバツクに対してもみだつたんです…」

「まあ、戦う人などたーくさんおるでなー。おめえさん方の場合だと重宝されちまうのは、もしかしたらそのバツクを持つておめえさんかもしねえ…」

「そうだつたですか…。でもこんな体格でこんな歳の人が冒険者なら、普通は魔物でも盗賊でも怖くて動けないと私は思います。それに比べて、ハルさんはまだ15歳です。もしかしたら、ここの人達の大人の基準は違うかも知れませんが、そんな人でもやつぱり怖いって思えば子供も関係ない。ボクは何もしてません。まだやつたことだつてない。なのに、そんな風に言われても複雑なだけです…」

クロはさつき起きたことを話した。不服そうな顔をしながらあつたことだけを話すと、村人さんも驚いていた。やはり『調合』はこの世界での『チート』なのかも知れない。

おい、神様！クロにこんな顔をさせるとはなんて罪な神だ!!そこんとこ、ちゃんと教えてからここに連れて行け!!まつたくつ!!

俺は自分のことよりクロのことで腹が立つていた。

俺も見せた方がいいんじや？いやでも、奴隸になつたらクロと離れ離れとか考えたくない…。どうしたらいいんだあつ!!

クロは俺に、俺はクロにそれを見て村人さんは大笑いしてきた。俺とクロは大笑いする村人を見て卑下するように見た。いきなり笑うからつてのもある。

「悪かつた、悪かつただ！いやあ、おめえさんらの熱い絆はそんじよそこの熟年夫婦よりも分厚い絆を持つてんだなあつて思つてよ！感心してただけだ！」

「だからつて笑うことは無いと思いますが？」

「それはもう悪かつたつて！そだ！オラの故郷もここと同じくらいの大きさなんだが、馬車だと3Kmはかかるだ。それでもええなら、乗せてくど？」

「どうする？ ハルさん」

まあ、ここはダメなところだし、印象悪い所には居たくないし出るか
「じゃあお願ひします。乗せてく条件に護衛もしますよ」

「ありがてえ、ありがてえ！ んだら、もう用は済んだからけえるかな。
あそこをまた通らな行かんと思つてたし、襲われたらたまつたもん
じやねえ。護衛がいてくれるなら、賃金はいらねえだ！ よろしく頼ん
ます」

そう言つて俺達は馬車の荷台の中に入つた。そして馬車が出た所
で、俺達は荷台の裾を開けるとさつきの受付のお姉さんと多分ギルド
マスターと思われるおじさんが俺達の名前を呼んでいた。俺達はそ
れを無視して、出ようとしたが村人の馬車がとめられた。

「ここで、魔法のバックと戦闘要員を見なかつたか？ 探してるんだが
⋮」

村人が後ろを振り返り荷台の方を見た。俺達を探すフリをしながら
理由を聞いた。

「なんで、その人達を探してるですか？」

なまりっぽい敬語で笑いそうになる。それを必死に耐える。クロ
は俺に釣られて笑いそうになつてゐる。

「先程の非礼をしようとして…。後で冒険者の方々に聞いたら
15歳で狩りをするのは、親が認めた子にしか与えられないらしく、
狩りをしてもいい歳は20歳になるまではしてはいけないと言つて
ました。それなのに15歳で、そんなことが出来るのはこの世界探し
てもいいとのことで、私がもう一人の子にしか目もくれなかつたこ
とをギルドマスター様に怒られてここまで来た次第です…。もしま
だいるのでしたら、謝罪だけでもさせて貰えたらと思いここに来まし
た。もう、出てしまわれてたらもし会えた時に伝えといつてもらえない
かと…⋮」

そう受付のお姉さんは言つた。村人は考へるように腕を組みながら、時間を稼ぐ。俺とクロは顎き合い、荷台から出た。それから何も無かつたように。

「俺たちに何か用ですか？」

と言った。村人は決断するまで待つことにしたみたいだつた。しかしここにいても邪魔なだけなので、村の外で待つてもらうことになつた。受付のお姉さんは深々とお辞儀をし、謝罪した。90度よりも深くだつた。ギルドマスターもお姉さんよりは浅いが謝つた。

「申し訳ない…、コイツはまだ入ってきたばかりの新人だ。そして色々と分かつてない箱入れ娘だ。仕事がないかと入つてきたんでな、受付係を担当になつてもらつてたんだがこんなことになるとは思わなかつた…」

「この人が入つて何日目ですか？」

「まだ3ヶ月だ…」

3ヶ月はまだ短いのかもしれない。働いて3年とかならまだ、スタート地点かなとかちよつと自信ついた頃かなどと思えるが、入りたてホヤホヤな状態なら短すぎる。そしてこの印象の悪さだ。

まあ、俺のは本当に戦闘系だしな。見た目旅人だし、剣とか持つてないしなあ…。ああでも、アイテムの中にはちゃんとそれ一式は持つてたか

使つてないだけであるにはある。だが、他の冒険者のように腰につけたりはしてない。となればそういう態度になつてもおかしくないだろう。まだ何か付けてた方が、変に思われなかつたと思う。

俺にも反省点だな…

クロがギルドマスターに話しかけた。俺が頭の中で繰り広げてる気持ちの葛藤に、集中してたので代わりにクロが代理で聞いてくれた。

「それでボク達に何か用なんですか？ボク達はその印象の悪いギルドを出たばかりなんですが」

トゲのある言い方なクロ。俺もいつかこういうことした時に、クロにそう思われてしまつたらと思うと怖くて仕方ない。そう思われないように、自分をちゃんと見つめなくちゃと思つた。

「それはすまなかつた…。ちゃんと適性検査もせずに印象を悪くしたことば、ちゃんと謝る。ごめんなさい…。だが、ここに立ち寄つてくれたならここで登録して欲しいのも、またこちらの願いだ…」

「ただ利益が欲しいだけじゃないんですか？それか奴隸のように扱つたりとか、ボクとハルさんを引き裂こうとか。ボクはさつきそういうのを受けたんですよ？それに、ハルさんはわかりませんが少なくともボクは信用していません。物珍しさで自慢げに言うのは良いですが、ボクの時とハルさんの時との反応が違うのもまた印象を悪くすることです。ろくに話も聞かないで、ずっと1人で話すような所に身を任せるのはボク自身は嫌です。ハルさんを危険に晒せたり、態度が悪い所にいてさらに印象が悪い所が見られるなら居ても後悔するだけです」

「うう…」

クロが俺を守るためにと言つてくれるんだろうけど、目の前にいるのはギルドマスター。ギルドマスターはその名の通り、ギルドの最高位とも言える役職。その人を目の前に芯の通つたクロの言葉に、たじたじなギルドマスターを見て俺は、何か起きないかとヒヤヒヤしている。何となくこういう時のクロを止めてはいけないというか、止めれないというか。そう思つてしまふ。そつとクロの手を繋いだ。クロがどこかに行つてしまわないように、俺の自己暗示。

「そこの所はどうなんですか？ボクは境遇を優越感に浸るような人間ではありません。かと言つて劣等感に浸りたいのも違いますけど。ギルドマスターさんがボク達の信頼を勝ち取れる何かを示してくれたら、ここに残ります。ボクは信用できないところに長居はしたくなないので、お早めに検討してください」

先陣を切るクロ。クロのコミュニケーション能力が凄すぎて、俺は多分口喧嘩だけで負ける気がする。

□喧嘩もするかはまだわからんが、そんな気がする…

しばらく考えていると、ギルドマスターはクロにこういう提案をしてきた。ここでできることは限られている。何を提案してくるのかと思つたら。

「（）のギルドは比較的に言つて特殊だ。他のギルドがどういうもんかは知らないが、ここは適正によつてランクが変わる。もちろん、ギルドの捷として皆Fランクから始まるんだがそれは階級なだけだ。

通行証とは違う。通行証は名前と職業のみ記載される。まあ、どこでも同じだろう。しかし、それの何が特殊かというと勇者や賢者といった英雄的存在な技能スキル、あるいは職業を持つてる人のみに与えられる銀タグのペンダントがある。これは認められた人間にしか身につけることが出来ないもんだ。今回の話だとお前さんは『調合』ができると言つていたな？ その適正検査を行い、本当に作れると認められたら銀タグのペンダントをやる。それは隣にいる相棒さんもしかりだ。これなら公平でかつ認められる話だと思うが？」

なるほど、俺の『目利き』も見れてクロの言つてることが証明されるわけだ。悪くない話だな。それに俺の力も見せれるなら、クロと同じ土俵つてもんだ！

ただ一つ怖いのが、それで貴族に魅入られて奴隸とかにされないかが心配。守られる保証もないというのに、そこはどうなのかな。

「それを付けたとして」

クロが話し始める。俺はクロの言葉を聞きながら疑問を晴らしていく。

「ボク達のメリットはなんですか？ デメリットも含まれるなら、嫌ですよ？ ボクとハルさんを引き離すようなことにならないかも、わからぬのにそれを信じろというのは今信用がない状態では無理な話ですよ？」

「そうだそうだ!! もつと言つてやれ!! クロー!!

とは言えないので、動向を見てる。ギルドマスターはクロの質問にこう返した。

「通常の銀タグペンダントなら、貴族に目をつけられやすいし雇おうとする輩もいるだろう。それだけ重宝されてる証拠だからな。それはこの村から出れば管轄外になつちまう。そうなれば手出しは出来ない。これが銀タグペンダントを持つ最大のデメリットだ。だが、これは『通常の銀タグのペンダント』を持つてたらの話だ」

強調された『通常の銀タグのペンダント』と、次の言葉を聞いた俺は、目を丸くした。

「銀タグペンダントは上というのではない。金とかプラチナだとか

な、そういうのは鉱石でとつてこない限りは作れない。銀ならこの近くでも取れる鉱石だ。通常の銀タグは鉄から作られる。それを銀に見立てて作るから『通常』なんだ。だが、本当の銀で作られた銀タグは国宝品だ。つまり国王陛下が持つ位の高いタグなんだ。それを身につけると『通常』と同じく、目をつけられるんだがここが違う点だ。本当の銀で作った銀タグは光に当てるとき光るんだ。それこそ太陽に当たると目が潰れちまう。それと、それを付けてると貴族はお前さん達に危害を加えることも奴隸みたく見下すようなこともできない。それは国王陛下を侮辱すると同じ扱いになるからだ。それを身につけていれば、こここの出だつて証明にもなる。ちなみに本当の銀を扱つてるのはここだけだ。こここの山にしかないからな。だから、特殊なんだ。どうだ？」

ハイレベルな話し合いになつてきた。もうこれはクロに委ねるしかないと思つてた。なのにクロは今になつて俺に相談してきた。

「ハルさんはどう思いますか？この話を聞いて」

いやいや、話を進めてたのはクロであつて俺じやねえよ…。どうするつたつてスケールのデカすぎる話に、ついて行くのがやつとな俺にどうしようと？

そう思いつつ俺の決定で決まる流れになつてるみたいなので、俺はとりあえず眞面目に考へることにした。

うーん、まあ、本当に銀かどうか調べることは可能だし作らせるのか、もう作つてゐのかわからんねえけど、鑑定して偽物ならここで作つてもらうのはやつぱり辞めよう。あ、それか作られちまつてるのを身につけるよりちゃんと銀かどうかを確かめてから作らせたら正確だよな？それならとりあえず適性検査は受けて、作るにしても、信用がない所に居たくないクロの気持ちも組めるだろうし、こつちからも条件出すか！

俺は頭の中で考えたことをギルドマスターに伝える。条件と一緒に適性検査を受けることを言つた。通行証と銀タグペンダントと一緒に渡すことと、もし俺の選んだ銀じゃないやつで作つたらここでの登録はしないという条件をギルドマスターにした。俺も俺でクロが

傍にいるつて思うと、心強いのか立ち向かえた。ギルドマスターは渋い顔をして考え込んだ。受付のお姉さんはとてもない空気感の中、頭にハテナを思い浮かびつつ話を聞いていた。どこの家かは知らんが、本当に箱入り娘なんだなと思った。

俺もついてくのがやっとだつたし、無理もねえけど…

しばらくしてやつと結論が出たのか、渋々と言つた表情でギルドマスターが了承した。それを村人に伝えに行つた。村人が困つた顔をしていると、ギルドマスターが金はいいから宿で泊まつてくれと言つた。すると村人はそれならと了承してくれた。村人は宿へ、俺達は再び悪品ギルドへ戻つた。それからそのまま適性検査室に通された。多分そんな名前ではない。

俺が勝手に付けた名前だけだ

まず最初にクロの適性検査が始まつた。ズラッと並べられた薬草たち。それらから選んで毒消しを作るという検査だつた。バラバラに置かれている薬草から的確に、クロへと渡さなくてはいけない。俺は考へてるよう見えて、『鑑定眼』を使つた。すると上位鑑定士の力が發揮した。見ると名前はよくわからないが、薬草の名前の下に説明書きが書いてあつた。毒に効く薬草と書かれたものだけを選んで、それをクロに渡した。クロはそれを見事に『調合』してみせた。

鑑定眼の簡単説明書きによると、『調合』は魔法の一種らしく三分クッキングみたいに、説明しながら作るらしい。それが呪文みたいになつて、単語の中にその呪文が記されてできるんだつて。鑑定眼の説明書きヤベーな…。でもなんで別々なんだろうな？魔法のくせに、なんか意味でもあんのか??

そういうことを考へてると。

「できました」

とクロの言葉が聞こえた。それをギルドマスターが大声で毒になつた人を連れてくるようにと、叫んで言つていた。クロは耳を抑えながらビクビクしつつ、俺がそばにいてよしよしと頭を撫でた。怖がつてるという設定にすれば、変に思われないと思つて勝手にしてる。それを弱点だとわかられたら何するかわからないからだ。信用

も信頼もなんもなくなるから。それからしばらくして、重症患者にクロの毒消しを試したところ、みるみるうちに熱が引いていくのを目で見てもわかる。これが『調合』の力のようだ。

ふう、なんとか成功したようだ…

それを見たギルドマスターが合格だと言つた。クロは感謝をして、それだけだった。まだ信用していないからだと思う。猫は警戒心が強い性質だからな。そして意外と繊細もある。次は俺の適性検査だ。魔力計測器なるものを使うのか??よくある異世界シリーズ物語があるあるだが…

案の定、球体のような魔力計測器が出てきた。しかもあるある系だつた。ギルドマスターの説明によると、この球体に手をかざして色が赤なら『火』、青なら『水』、黄色なら『雷』、緑なら『風』、茶色なら『土』、白なら『光』、紫なら『闇』と言つた感じらしい。俺は言われた通り、球体に手をかざした。すると、俺もギルドマスターも目を疑つた。

「虹…色?」

「虹色だと…!」

俺はキヨトンとし、ギルドマスターは顔をしかめて考え込む。なんか凄いことなのか、それともダメだつたのか。この場合はだいたい良い方に傾くが、ギルドマスターの顔がなんだか忙しない。

これはダメな方なんだろうか…

シユンとした顔になるとクロが頭よしよししてくれた。その後ギュッと抱きしめてくれた。クロはギルドマスターをキッと睨み、それから窓の外を睨んでいた。神様がいる方向を見るのかは知らんが、よくある猫の謎行動に似ていた。俺も猫獣人だからわかるのかもしれない。そんな動きとかしてしまいそうで恥ずかしい。（※もうしてる）

沈黙が怖い…

しばらくしてギルドマスターが受付のお姉さんを部屋から出して、受付場に戻るよう指示をした。それから去つたことを確認してから話出した。とても深刻そうな顔をしている。質問もされた。

「お前さんの名前は？」

「ハルです…」

「お前さんは？」

「クロです」

「ハルとクロな、わかつた。まずはお前さんの適性検査は合格だ。そこから少し質問をしてもいいか？」

「……はい」

何を質問されるんだ？俺何か悪いことでもしたのか？

「まずハルの虹色についてだ。虹色の判定をされることには、この世界を探してもいいだろう。いて、『神クラス』の色だ。つまり神様から授かった色という事だ。譲渡してもらったのか、産まれる前かは知らん。それは人それぞれだ。昔の話では神から授かった者は、転生者と呼ばれている。お前さん達はその類かもしれないと、俺は睨んでいる。だからといって悪いことを企ねないと言うわけじゃない。これは保護しなくてはいけない代物だからだ。お前さん達は村々でなら希少価値とは言わない種族だ。だが、王国には人間しかいない。いつもドワーフくらいだろう。それだけ貴重な種族だ。そしてさつき奴隸にされるとかの話は本当だ。現に、王国にそういう冒険者が迎え入れられたが実際はそういうことをされてるらしい。帰ってきたやつはほとんど居ない。幸福なのか不幸なのかはわからんが、色々とされてるらしい。時に実験に使われたりもしてると聞く。あくまで噂にすぎないが、そういう扱いをされてるのは事実だそうだ。俺の村からも何人か連れていかれた。こき使つてるらしい」

俺のレベルって『神クラス』だったのか…。そりやあそういう顔にもなるわな…、俺でも頭を抱える…

ギルドマスターの話は続く。

「そこでお前さん、ハルに質問だ。答えはハイかイイ工で答えて欲しい」

「わ、わかりました…」

「お前さん、『鑑定眼』を持つてるだろ？」

「！」

なんでバレた!?こ、これは正直に答えるべきなのか?!でもバレたつてことは何か不自然なことを俺がしたことになる。そうなるとクロが危ない!!

俺がどう答えるべきなのかと考えてるとクロがギルドマスターに質問した。

「その質問に對して答えた場合、何がありますか？信用も信頼も得てない以上、その説明を聞く権利はありますよね？」

警戒心がさらに強くなつたクロはギルドマスターを睨みながらそう言つた。ギルドマスターはクロの顔を見てため息を吐き、説明した。

「この質問はあくまで俺の個人的なものによる。誰かに口外するだとか、国に報告するだとかをするためじやない。ただハイと答えたことへの忠告をするためだ。これから旅に出たり、王国に向かうならそれなりの心構えは必要だと思つてな。これでいいか？」

「な、なんだ…。驚かさないでくれよ…。俺が悪いことしてしまったみたいな尋問だつたぞ…。疑うのは警察みたいでわかるが、引きこもりニートだった俺には無縁だつたんだからな？その点理解しとけや、バカ!!」

真面目に子供の思考で癪癪を起こす。クロは俺を落ち着かせるために頭をよしよしと撫でながら宥める。それから改めて俺は本当の答えを言う。神様は伏せとけと言つていたが、俺はこの人ならと信じたのだ。

「答えは、ハイ」

「一つ一つ説明していく。まずこの質問をした意味は、薬草を見る時の目だ。これは玄人の人間にしか見分けがつかない。この世界にも鑑定士はいる。だいたいは王国に住んでるからな、この辺の村にはいない。だが、ここまでの大鑑定士はいないだろうな。探してもだ。お前さんしかいないだろう。『鑑定眼』を使うと、目が光るんだ。主に右の目に出る。お前さんの目は、晴れた日の青空のように澄んだ目だ。綺麗な鉱石系の目をしてる。こんな目の鉱石があつたら取つて見てみたいほどだ。さすがに人の目を取る趣味はねえから、そこは安心し

る。普通のヤツらには見えない輝きなんだ。そこでさつき説明した、忠告の話しだ。王国には賢者とかいうやつや技能スキルが優れたやつなら、見えるであろうお前さんの目を見たら間違いなく自分の味方にしたくなつて、ありとあらゆる力を使ってお前さん達を襲いに来るかもしない。だから、右目を隠した方がいい。普段はそのままでも綺麗な目をしてるだけで、そこまで重要じやない。問題は『鑑定眼』をしてるところを見られることだ。それが一番危ない。目を光らせないようになされた方がいい。なにか装う技能があれば右目だけはした方がいいだろうな」

意外と親切だつた。ここまで説明されるとは思わなかつた。素直になつてよかつた氣がする。『偽装』を持つてるので、それでなんとなるだろう。

「次の質問だ。お前さん『魔眼』を持つてゐるか？」

「魔眼??」

それは俺の技能内にはなかつたはずだ。昨日もう一度確認した時もなかつた。まさか、俺は見落としたのかと思い『ステータス』を開いた。考えながら聞くためにクロに目配せして、クロが聞く。

「魔眼つてどういうのなんですか？」

『魔眼』は自分で自覚してゐる者としてない者に別れるんだが、ハルの場合は後者のようだ。稀に無意識に開眼してゐる技能なんだ。お前の左目は紫だな。普段は普通の目だろうが、魔力を使つてゐる時に無意識に暴走することがある。『魔眼』には薄く模様が出るんだ。禍々しいものから神秘的なものまで幅広くな。その中で模様が色濃く出でる者は、無双者と呼ばれる。ハルの目はその無双者と呼ばれるほどに濃かつた。だから質問した、『魔眼』はあるかと

クロが聞いてくれてる間に見てゐると技能の1番下に『魔眼』があつた。本当に見落としてた。というか『魔眼』以外にもたくさんなんか持つてた。スライド式とは思わなかつたが、今はとりあえず『魔眼』を鑑定することにした。

『魔眼』とは、大賢者や英雄などが稀に持つてることがある。しかし遺伝子で使えるものでは無い。転生しない限りその眼を使うことは出

来ない。さらに、魔眼の特徴は模様が出ること。通常は目の色と同じく、薄く出てくる。しかし、濃く出る色は黒か白に別れる。黒い模様が出た場合、魔王に匹敵するほどの神眼。白い模様が出た場合は無双者と呼ばれる神眼』

わわわ、ヤベー技能じやん！これ！

次は『無双者』を鑑定。

『無双者とは、その名の通りなんでも出来る者。剣技、魔法、体術、忍術、弓、槍、回復etc…。戦闘力が高く治癒力も高い。高位魔法や攻撃技などが全て使える。付与もまた、神の加護以外に無双者があるとさらに強力な物が作れる。所謂、最強無敵チート技能』

もう最後の方、チートって言っちゃってるよ…。最強無敵までいいじやん…。チートって言葉使つたらもう、本当に人類滅亡するじゃん。俺を敵に回したらおしまい展開じやん…。こここの異世界涙目だ…。ありがとうございます、神様チート様鑑定眼様：

心の涙を流しながら『ステータス』を閉じた。それからまた、俺はギルドマスターの質問に答えた。

「答えは、ハイ」

ハイと答えたら盛大な溜息をつかれた。そして確認のためかもう一度、俺に王国に行きたいかと言われた。

「行きたいというか、行つてみたいが本音かもしれないんですけど…」

「そうか、んじやあそれを踏まえて説明しよう」

忠告とはいえ、なんだか不穏だ。何を言われるのか身構えていると。

「正直な気持ちとしては、俺はここにいて欲しいと願つてる。理由は銀タグを付けるにしても、目をつけられるにしても『魔眼』を持つ者を国王が見逃すはずがない。自分の手元に置きたいと思うのが本音だ。この世界で『魔眼』を持つものは、賢者や英雄以外にいないからだ。しかもこんな小さな子供が持つてるなんて、神童と呼ばれる以外ないだろう。『魔眼』を持つていれば国1つ滅ぼせる代物だからな。王国が黙つてないだろう。だから、なにがなんでもお前さん達を雇いたいと言うだろうよ。拒否すれば人質を確保して脅しに来るだろう

し、そうでなくとも国から出さないと言うだろう。そんな所にお前さん達を連れていきたくない、というのが理由だ」

真剣な目で俺達を見るギルドマスター。「これは本気なんだなつてのがわかる。ここまで説明をしてくれるのは、親切から来るもんでもスケールがでかい。

『魔眼』を持たなくとも、噂は絶えないような所だ。それでも行きたいか？」

行かせたくないという気持ちがすぐわかる。俺はクロを見て、クロの意見を聞きたくなつた。やつぱり王国に行くのはやめた方がいいのか、と。

「ハルさんがこの話を聞いても、どうしても行きたいと願うならボクはそれに従いました。でも、迷いがあると言うならボクもギルドマスターさんの言葉に賛成です。行つて何が起きるかわからないのに、守れない領域に達したらギルドマスターさんは手出しできない。といふことはボク達は自分達で自分の身を守らなきやいけない。でもハルさんはまだそれができない。能力があつても使いこなせていない。どんなに強いスキル技能を持つしていても、いざという時に使えなかつたら目も当てられません。それならボクはギルドマスターさんの言葉に従います。まだギルドマスターさんしか信じていないので、他の方はどうか知りません。あの受付のお姉さんに対してはもつと信用してません。ハルさんの勇姿を見てないからあんなことが言えるんです。そんな人とこれから立ち会わなきや行けないなら、ボクはここに居たくありませんがハルさんの言葉に従います。ハルさんがここがいいと言うならボクは我慢します。だから、ハルさんはハルさんの気持ちをギルドマスターさんに伝えてください。ボクはハルさんの唯一の家族でありパートナーであり、相棒ですから！大丈夫です、ハルさん！」

クロに勇気を貰った俺はギルドマスターに言った。

「ギルドマスターさんの言う通り、王国に行くのは辞めます。村が街みたいなものなら、ここを拠点したいです。でもやつぱり銀タグは欲しいです。狙われたくないですから。それと……」

「ん?なんだ?」

「15歳で敬語じゃなくて、タメ口つて変ですか?」

「…………」

沈黙してしまった。変なことを聞いてる自覚はある。でも俺はタメ口の方が慣れすぎてて、敬語は窮屈。もし許して貰えるなら、そうしたい。そう思つてギルドマスターに質問した。するとニカツと笑つて。

「ああ、良いとも!それと…って言われた時は『少しでも品が悪かつたらすぐ出てく』とか言われんのかと思って、ヒヤヒヤしたぜ…。そうじやねえなら大歓迎だ。まあ、人によつては敬語を使わないことに睨みきかす輩もいるだろうが、そこはまあ気にすんな。俺が許したんだ、そいつにどうこう言う権利はねえ。なんか言われたら俺に報告してくれればいい。うーん、それならこっちにも一応のルールを伝える。本当は受付の奴に言わせるもんだが、今回は特別に俺から説明する」

許してくれただけじゃなく、笑い話みたく返された。プラス、クロのために配慮もしてくれた。

クロは受付のお姉さんを毛嫌いしてゐるからな…
ギルドマスターのルールを簡単に説明すると。

1. ギルド内の揉め事は禁止
2. 依頼書は1日3つまで
3. 自分のランクにあつた依頼書を受けること
4. 昇格審査を受ける時は必ず受付に言うこと
5. 自分のランクより強い魔物が出た時は逃げること
6. 何かの招集をかけられた時は必ず参加
7. 先輩後輩という優劣はないが見下す行為は禁止
8. 仲間は大切な家族
9. 仲間の秘密は絶対厳守
10. 上記が守れない者はランク格下げ+タダ働き2年

との事だった。

「何か質問はあるか？」

「さつきのルールの中に気になることがあつたんだが、いいか？」

「ん?なんだ?」

「聞き間違いやなければ、タダ働き2年つて言わなかつたか?」

「ああ、言つたな」

「重たつ!?

「とは言つても、実際は半年くらいだ。よっぽどの事がない限り、2年とかはない。が、万が一があるからな。そこはとりあえず、重たくしてる」

「そ、そうか?」

中々に温かく、それでいて厳しい。やつぱり信じて答えて正解だつた氣がする。拠点にするにしても、いい上司じやないとやつていけない部分はどこの世界も同じだ。ブラックは断固拒否。

ここがブラックじやなくて良かつた…

それから俺達は適性検査室を出た。ギルドマスターと共に受付のお姉さんの所へ行つた。クロは俺の後ろに隠れて何も言わない。ギルドマスターは改めて、受付のお姉さんの紹介をした。

「コイツは、アンナ・リスター。みんなアンナつて呼んでる。どこかの貴族の家柄らしいが、そこら辺は詳しく聞いてない。お嬢様がこんな田舎村に来るなんてとか思つたが、ここでどうしても働きたいって言うんで働かしてる。仲良くは出来ねえかもしけねえが、一応紹介した。だが誠意だけはわかつてやつてほしい。本当に申し訳ないと思つてるらしいからな」

「らしいなんて!本当にそう思つてます!何も知らずに口走つていたのは本当ですから…」

ギルドマスターの言葉にアンナさんは申し訳ないという顔で、俺の方を見てまた深々と謝罪をした。

「この度は、不快な思いをさせてしまつたこと深くお詫び申し上げます…。初対面な方にはんにペラペラと、品が悪いと言われても何も言い返せません。本当に申し訳ありませんでした…!」

90度からほぼ垂直と言つてもいいくらいにお辞儀した。体が柔らかくなくちやできない行為だが、俺はとりあえず大丈夫ですと言つた。クロはまだアンナさんのことと信用していらないらしい。顔をそむけてフンツとしてしまつてゐる。アンナさんはクロを見てずっと頭を下げた状態だつた。俺は見かねて。

「クロ、こんなに謝つてるんだ。今だけは許してやれ。あの時のことを行つて謝つてるんなら、俺はもう大丈夫だから。それに俺のためになつてくれたクロのことは誇りに思うが、頑なにそういう態度は誠意を込めて謝つてる人に失礼だ」

「わ、私はそんな…！」

アンナさんを制止し、俺はクロを見た。クロは俺を見てシュンとし、それからアンナさんに。

「まだボクは貴女を信用してません。ですが、貴女がこれからボクに信用に値する努力をしてくれた時に許します。それまでは引きづると思いますが、今だけはハルさんに謝つてくれたので良しとします。なので、頭を上げてください。アンナさん」

名前を呼ばれて頭を上げたアンナさん。大声で返事をし笑顔になつた。クロはその笑顔を見てまたフンツと顔をそむけてしまつたが、とりあえず解決。その後、俺達に銀で作られたタグのペンダントとFランクのギルドカードを貰つた。作るつもりでいた通行証は作らなかつた。王国に入国する時は必要でも、入国する必要が無い時は作らないでいいそうだ。その2つを貰つてから、俺達は村人のいる宿屋に行き報告した。

「そうかあ、ここに残ることを決めただか…。そうなると、護衛ができるんな…。あそこを通らないかんから、喜べたんだがなあ…」

「その事なんだけど、これは他言無用でお願いしたい。あんた、ペラペラ喋つちまう人間かもしれないけどペラペラ喋ると効果が切れちまう魔法のランプがあるんだが、聞くか？」

「ペラペラ喋ると効果が切れる魔法のランプ??」

魔除けランプの事は鑑定眼で見た時に『神クラス』のもんだつて書いてあつた。それはもしかしたら、他の人に取られる心配もあるから

で守る意味がなくなる。そこで俺は、口が軽そうな人でも簡単に口を固くする嘘を村人に言つた。説明はこうだ。

「この魔法のランプの名前は、魔除けランプって言うんだ。魔除けだからあらゆる面での魔除けだ。魔物も盗賊も、人間を襲うような敵意の者達を遠ざける役割を持った本当に魔法のランプ。だけど、1つのランプに欠点があるんだ」

「欠点？」

「それは、ペラペラ喋ると効果が切れちまうんだ。これに火をつけたのは俺だから、俺は効かない。最初に点けた者が主人だから、主人には逆らえない。つまり、効果が消えることは無い。だが、主人から手渡されてもその効果はずっと続くが主人でもない奴が、他のやつに言うとその効果が切れちまうんだ。切れちまうと、その名の通り効果が切れて使えなくなる。いわゆる、普通のランプになっちゃうんだ。そうなつたら魔除けランプじゃなくなる。守つてもらえなくなる。そうしたら襲つて来るつてわかつても、守られない。結果、今日みたいに襲われる。そうなつたら、困るのはあんただし、あなたの村だ。そりだろ？」

「村のみんなにも言つちやあダメだか？」

「誰が聞いてるかわからない。もしかしたら、別の村に言つちまうかもしれない。そうなつたら魔除けランプを盗む輩がいるかもしねない。襲つたり敵意がないと効果がないんじや、意味が無いからな。そしたらあんたの村は壊滅、もしくは消滅しちまう。それが嫌なら他人にベラベラ話すのはやめた方がいい」

「家族にも言えねえべか？」

「同じだ。誰が聞いてるかもわからない。子供が自慢すれば、妻が自慢すれば。……もう、わかるよな？」

村人は自分の家族や自分の村が襲われると思うと青ざめた。絶対に誰にも言えない状況を作れば、自分は助かるし村も家族も守れる。村のシンボルみたいにすれば、村の直径10mは守られる。村一つは確実に守れる。との他の村も入るようなら、その村も守れるだろう。村人は固く口を抑えて約束をしてくれた。それから耳打ちで、魔

除けランプの効果がどのくらいの範囲かを伝えると、村人はまた驚いた。目を丸くして。

「それは、ペラペラ出しちゃあいけねえ代物だ！俺は口が軽いが、村や家族を守れるんならその方がいい！ありがてえ、おめえさん！」

感謝した村人は頭を深々とお辞儀し、明日の朝に渡すと伝えた。俺とクロは村人の居るこの宿屋を一晩だけ下宿することにしていた。村人の部屋から2個離れた、ツイーンの部屋。ベッドが2つあればそれぞれで寝れると思い、俺がそうした。

「ふう、色々ありましたが何とかなりましたね！」

「そうだな。けど、クロ」

「はい？」

〔敬語〕

「あ、ごめん。つい…」

「最初に言つただろ？俺への敬語はなしつて…」

「そうだね…、ごめんね、ハルさん…」

「次からは気をつけろよ？」

「うん、ハルさん！」

クロの頭を撫でてから、今日は疲れたので食事は明日取ることにした。色々ありすぎて疲れてしまったのが本音だ。王国に行つてみたって気持ちちは本当にあつたけど、噂が絶えないような危ない橋は渡りたくない。クロと離れ離れになる率が格段に上がる。

それならこの決断が1番正しいよ

今日はそのままクロと寝た。一緒のベッドではないが、クロも同じくらい疲れて寝てしまった。

「おやすみ、クロ…」

眠る前にクロにそう言つて、俺も寝た。また明日も、クロと元気に活動するために。

【3日目、拠点が決まつたところで…】

朝が来た。昨日は寝袋だつたけど、今日はベッドの上。やつぱりベッドは気持ちがいい。二度寝したい所だが、それはクロが許してくれなかつた。クロがニコッと笑顔で起こしてきて、朝食を取るようになに催促してきたからだつた。あと理由があるとすれば、朝食が終わつたら村人はそのまま村に帰るらしい。その前に渡すものを渡さなきやいけない。なので、二度寝はできない。しばらくして朝食を食べ終えて、チェックアウトはまだせずに村人のいる馬車の方へ行つた。するともう荷物を運び終えた村人が、俺達が来るまでずっと待つてくれた。非常に親切な村人だつた。

「おおー！おめえさんら、早起きだなあ！昨日の話聞いて、楽しみだつただよ！どんなんもん、おめえさんらから貰えるんか！ランプ言うても見た目は同じだろ？」

「ああ、同じだ。だから、あんまりわからんと思う。でもこの馬車につけたら、ちゃんと街の中心にかざすんだ。そうすれば夜道も、怖がらずには済む」

「本当にありがてえ話だ！けんど、怪しまれないかい？」

「その時は神様からの授かり物だつて言つておけ。あんたを助けてくれた神様つてことだ」

「わかつただ。このランプを信じて信仰すれば村は襲われねえで済むんなら、おめえさんの言葉を信じる！そろそろ、行くべ。またどこかで会つだら、その時はよろしく頼ります！」

そう言つて村人は馬車に乗つて去つて行つた。俺達はまた下宿部屋に戻り、支度する。それと今後の計画を、これからどうするか話し合う。

「さてと。街に行くはずが街はなく、代わりに王都があるつて話だつたよな」

「王都じやなくて、王国だよ。ハルさん」

「王都も王国も変わらないだろ？」

「そうだけど…」

「問題はそこじゃなくてだ。普通にギルドへ行くとして、ギルドの依頼書を見て依頼を受けてソレをこなす。徐々に回数を重ねて慣れてきたらランクが上がったりするわけだ。それはどんな異世界ものでもありふれたシナリオ。それに関しては俺も熟知してる」

「それのどこに問題点が？」

クロの質問も最もだ。何故なら、どこにも問題点がないから。だけど、昨日の話。ギルドマスターが言つてた忠告の話だ。つまり、名声を上げればそれだけ目につけられて王国に伝わる。伝わるとこの冒険家達のように連れていかれて何されるかわからない。

そうなつたら、クロを人質にとるかもしれない。そしたら俺が何をするかわからない。もしかしたらこの異世界を破滅か滅亡かそれ以上に結末に導く可能性も…

「依頼をこなすのは問題にならないが、名声をどう上げないようにするかだ。それなりに噂が立つのはいい。でも、その後変に噂されて王国にでも目をつけられたらと思うとな…」

「あ、昨日の…」

「ああ、そうだ。そうならないための今後のルールを決めようと思う。俺自身のための旅だ、それを誰かのレールに引かれて歩くのは現世でもやつてた。でも、ここは違う。同じレールでも意味が違う。良いように奴隸にされるのはごめんだ。だからこそ、クロと一緒にたくさん経験が欲しいから地道にコツコツとそれでいて目立たないようにしていきたいんだ」

決意を言うような目でクロを見つめる。クロも俺の目を見て目を輝かせ、そして。

「はい！ボクで良ければお手伝いします！ハルさんのために出来るなら、ボクはどこまでもついて行きますよ!!」

「おう！」

クロの笑顔は俺の励みであり、俺に勇気をくれる。最高の相棒にして、最高の家族だ。でも。

「クロ、敬語」

「あ！……『めんなさい…』」

シユンとして耳が垂れる。可愛い。少しづつ慣れていくしかないと思い、頭を撫でる。頭を撫るとクロは嬉しそうに喉を鳴らす。気を取り直して、まずはこれからルールを決める。

異世界もののセオリートしては、こんな絶対にないけど俺には必要だからな

1. ランクが上がるまでは無理をしない依頼を受ける
2. 人がやらないような依頼を受ける
3. 魔物退治はこの世界に慣れるまでは行わない
4. 魔法や剣技の練習や体力作りは夜に行う
5. 日常生活を毎日やること

まず、これらをできるようにする。

最後の5は普通の人ならできることだが、俺はそれを現世でやれなかつたからな。慣れるまではこれもいれておく。そうすればできた頃には習慣になつてたるだろうし、5以外も両立してできる

俺のこの目標はクロにも当てはまる。最後の項目は主に俺のサポートだが、他はまずこの世界に慣れるために必要なルール。この項目が全てできた頃にはランクも上がつてたると思いたい。

いや、そうなるようには頑張ろう

ルールが決まつたら次は、俺の目の『偽装』をする。目が光るとそれはそれで目立つ。となると、色々制御しなくちゃいけない。なので、色々弄ろうと思う。

「まずは、『ステータス』

『ステータス』画面を開いた。それから両目の『偽装』から始める。俺の目は紫と青、それは変わらないがコンタクトをつけてる感覚で変に思われないようにした。試しに魔法や『鑑定眼』を発動させてみて口に確かめさせた。グッドサインが出たので発動を中止、『偽装』は完了。次に服装を調達しようという話になつた。マントと村人服じやあ、戦力にも替えもない。そうなると、色々と面倒だ。私服も欲しい。

『アイテム』

『アイテム』を開くと、装備一式は揃っていた。替えもあつた。が、私服等はなかつた。たまには休日も欲しい。そんな時に、私服がなかつたら息苦しい。村人服でもいいが、これは新着するしかない。とりあえず残金の確認。ちなみに右下端に書いてある。

「神様優しい」

「どうしたんですか？」

「こここの通貨の名前はわからないが、5万は入つてる。これなら服もそれなりに良いものが買える！」

「神様も粋なことをしてくれたね！」

「さすが俺達の爺ちゃんだな」

「あれ？ ハルさん。神様のことお爺ちゃんと認めたの？」

「！！ち、ちがつ！！いや、違くないけど…。な、なんとなくそう言いたかつただけだ！！深い意味は無い！！」

「ふふ、そういうことにしくよ♪」

まつたく、クロは揚げ足を取るのが上手いなあ…：

頭を振つて顔を冷まし、それから村人服に着替えて準備をした。宿はチエツクアウトしようと思つたら、ギルドマスターにしなくていいと言われたらしくここが俺たちの拠点になつていた。ありがたい話だ。それから宿屋の店主に服屋があるかと聞いたら、この宿屋を出すぐの右側にあると教えてくれた。

「結構近くにあつたんだな…」

「全然気づかなかつたね…」

「まあ、俺達の体格じやあわからんかもな」

元いた世界の俺の身長と今現在の俺の身長では、首を上げなければ見えないが体格差もあり首を真上に上げなければ看板が見えない。

まあ、教えて貰えたから結果オーライだ

中に入ると。

「いらっしゃーい！」

おそらく店員であろうお姉さんと、獣人だろう店主が待ち構えていた。

「何がお探しですか？」

「私服を見に来た。お金に余裕があれば買おうかなと思つて」

「私服と言うと討伐に行く時の軽い服装ですか？それともただ街を出歩くためだけに使う服装ですか？」

「街を歩くため」

「では、こちらなどいかがですか？」

渡されたのは村人服とはまた違う生地とデザインだつた。服の纖維はもしかすると、シルクかもしだれない。ただこれだと少し地味。「この生地はすごい上品で、貴族の人達が好まれて使う素材でできた服です。価格はちょっと高めですけど、人気の商品です」

シルクだもんな…、そりやあ好かれるだろうよ

「クロはどうする？俺はもう少しだけカツコイイの貰おうと思つてるけど」

「ボクは予算があればこれが買いたいです」

「ちなみにこれはいくら？」

「1200ユールです」

えつと……鑑定！

『ユールとは、お金の単位のこと。日本円で1200円。万単位で1ユラル、億単位で1ラール。といった具合。村での相場は1000以上のユールがお買い得。高い値段で20000ユールまでが村で出して良いルール』

えつと、そうなると俺の持つてる金が5万だから5ユラルってことか？うーん、難しい…。覚えないと…

日本円で1200円ならまだ安いかもしだれない。村だと高値なのかもしだれないが、こつちには5万ある。なのでクロの服はこれで決まりだ。あとはもしものための大人バージョンなクロの服装も買っておこう。一応、これは今の体格のクロには合うが、大人のクロはちょっと幼すぎるところがある。

「クロの服はこれでいいとして、俺のはもう少しカツコイイ服がいいな」

「それでしたら、こちら等はいかがですか？」

渡されたのは魔法使いがよく使うローブのような、足の付け根より

は少し短いジャケット。大人のクロにも合いそうな服。色は黒をベースに白で少し装飾してる。黒にはやつぱり、白が似合う。見栄えする。

「これのもう少し大きいのあるか？」

「？……お客様が小柄ですからこちらの方が良いのでは？」

まあ、見た目はな。大人のクロはまあ兄といえば兄だから、それも良いか

「俺には兄がいて、その兄の着る服を探してもいたからこれより少し大きいのが欲しいと思って。あ、色はこれと同じでいいから。俺のはこれの色違いで何かあれば：」

クロを見ると自分も何か少しマントみたいなのがあつたら、お揃いになれるのにという目をしていた。するとお姉さんがクスッと笑つて。

「お連れの方はコレとかどう思いますか？」

持つてきたのは、服の上から羽織るだけで前が開いてるローブ。装飾は何もしてないが、俺と同じような服装だ。それを見て目を輝かせるクロ。俺はその目に負けて買ってあげることに。それから大人のクロの分と、色違いで俺の分も買つた。5500ユールした。

ちなみに、俺の色は黒をベースで装飾色は青紫。俺にピッタリの色だ。ちなみにこの街を歩く上でも使えれば、いざ本当に街で戦闘になつても付与魔法が付いてるため防御服にもなつてるらしい。優れものだ。クロの羽織りも付与魔法が備わつてるので、安心

それから服やらは『アイテム』の中にしまい、俺達はもう一度宿屋に行き次は雑貨屋がどこにあるのかを聞いた。すると向かいの店らしい。俺達はそこに行つてみることにした。

「雑貨屋では何を買うの？」

「とりあえず付与されてるアクセサリーを見ようかと。あとは、ファッショńも兼ねて」

アツチではそんな金もなければ、容姿自体に興味がなかつた。だからずつと地味な格好、どうせ帰ることがないならこつちで色々としたい。

それに、今の俺はアツチよりも体格や容姿が可愛くもかっこよくもなれるハイスペックだ。どんなのでも似合う。…って、自分で言うと恥ずかしいなあ： 中に入ると。

「いらっしゃい」

男の店主が出迎えた。こつちは普通の村人。そして職人つて感じの服装をしてた。服屋は獣人でそんなに服にこだわりがあるような感じじやなかつた。どつちかつて言うと、店員の方がある気がする。まあ、服を買つてもらうなら店主よりも店員か

「何か、探し物か？」

「アクセサリーとか。できれば付与付きのがあれば、買おうかと。それと普通にファッションでも合いそうなヤツかな」

「……妙な注文だな？まあいい。付与系のアクセサリーなら、そつちの棚にあるヤツがそうだ。だが鑑定士じやない奴が見てもわからんよ。付与魔法でどんなのが付いてるかなんてよ」

俺が小さい子供だから侮つてやがる。まあ、その方がいいのかもしれねえけど

俺達はどれにするかと時間をかけて見た。ファッショնにも合うもんを選びたいと思うと、時間がかかるもんだ。指輪もいい、腕輪もいい、首飾りもと考へてると、じつくり見ていたくなる。するとクロが、俺が考へてる時に自分が欲しいと思つた物を指さした。

「クロはそれが欲しいのか？」

「うん、さつきの服屋で買つた服装に合うかなつて」

クロの選んだアクセサリーは首飾りだつた。付与魔法の鑑定を見ると、『物理防御』と『魔法防御』が付いていた。すると、それを見た店主が話しかけてきた。

「そいつは、『物理・魔法防御』の付与がかかつてゐるが、不意打ち系はあんまり作用しない。自分に向けてきた攻撃系に反応する。まあ、サポートや回復系の職種持ちならそれで足りるだろう。逆に戦闘系だと少し物足りなさがあるかもだが」

親切に教えてくれる店主だつた。

「それと、その首飾りについている指輪二つにはいわく付きのもんだ。呪いとかそういうのじゃねえが、なんでも結婚？だかの儀式に使用された指輪らしい。そしてそれを教会とかで行つたために『神の加護』として、『天使の祝福』つてのを与えてるらしい」

『天使の祝福』……？

鑑定してみることにした。

『天使の祝福とは、戦闘不能や気絶などに該当した時に天使によつて、一度だけ生き返ることが出来る。魔法や調合では人を生き返らすことは出来ないが、天使の祝福を持つ物にのみ使うことが可能』

一度しか使えないのは貴重だな…。でもそれを使わんでも、『物理・魔法防御』が付いてるならそれもありか

「クロはそれが気に入つたか？」

「うん、なんとなくだけど。これがいいなって」

「うーん、それか…。俺はこの腕輪もクロには合いそうだと思つたんだがな…」

「おっ、それは2匹の黒猫が装飾された腕輪だな。そこにもう1つ同じ白猫の腕輪もあるだろう？それはペア腕輪だ。片方ずつそれぞれに付与魔法は違うが、共通付与が『探知』だ。これはその腕輪を付けてる者しか探せない。いわゆる人探しだな。ありえない話でもない、盗賊やらの賊に攫われた時の追跡なんかができる。まあ、それ以外の共通はペア腕輪だけだがな」

『探知』は便利かもしれない。特定の人間が付けていれば迷うことなく、そこにありつけれるわけだ。迷子になつても同じこと。それはいいかもしない。

それにクロとペア腕輪ならどんな服装にも合いそうだ

クロはそれを聞くとこっちが良いと了承してくれた。多分、『ペア腕輪』つて所に反応したんだと思うが、それでもお揃いがあるのは嬉しい。大人のクロにも合うアクセサリーがあつて良かつた。
「んで、それぞれに付いてる付与の説明は必要か？」

……うーん、後で調べてもいいがそれだと変に思われるかな？思われなくとも聞いて損は無いだろうし、聞いておくか

「んじゃ、頼む」

「まず、黒猫の腕輪からだ。そつちは戦闘系に特化した付与魔法がかつていて。『物理・魔法攻撃上昇』と『防汚』、それから『暗視』だな。白猫の腕輪はサポートや回復系に特化した付与魔法だ。『物理・魔法防御上昇』と『回復上昇』、それから『魔力吸收』だ。ちなみに、その腕輪は特殊でな。付けてる者にのみ、同じ付与を与えることが出来る。例えば『防汚』、これを白猫の腕輪の奴にも使いたいと思えば戦闘時に自分も使ってその相手にも使える。それは逆も同じで、白猫の腕輪の付与に持つ『魔力吸收』を黒猫の腕輪を持つてる奴に使わせたりすることが出来る。ただ、1つ欠点なのは使つたら1日使えなくなることだ。次の日になれば使えるようになるが、ご利用は計画的につてヤツだな。まあ、特殊付与は早々使うもんじやないが、いざつて時に使うが得だ。『物理魔法防御』や『物理魔法攻撃』系は譲渡することが出来ないから、そこは履き違えるな。あくまでサポートになるものしか特殊付与は使えない。何か質問は？」

これだけたくさん教えてもらつたなら、これが一番性能がいいアクセサリーだ。異議はない。つまり『暗視』もサポート系に入るのでもクロにも使えるという事だ。これはなかなかに使える。首を振つて、これを買うのは確定した。後は、クロのための帽子を作るために布を買うこととした。生地は黄色と青が入つたのがいい。クロのチャームポイントである、目の色があつたらと思つて探す。クロにも、クロがこれがいいと思うやつを探してもらつた。クロが好きだつて思うやつで帽子を作りたいと思つたからだ。

俺が選ぶより、クロが選んだ方が長く使つて貰えそうだし

「じゃあこれが良いなあ」

クロは黄色と青のチエック柄を選んだ。素材はニット帽とかによく使われる生地。

「あと、これ！」

あと、黒の無地。

「これで、黒猫のバッヂを作つて欲しい！」

.....

「ハルさん？」

「なんと、……なんという可愛きなんだ!! 黒猫はクロがぬいぐるみだつた時のチャームポイントの1つ! 黒猫なんだから当然と言えば当然!! 必需品!!

「じゃあそれを買おう」

何も無かつたかのような顔でニコツと笑い、それからバツチを作るためにいくつかの板のような小物を見繕い、それを店主がいる会計場に向かつた。

「ひーふーみー…………、全部で7点だな。合計4500ユールだ」
さつきの服屋の所でも変わらない値段。この数はだいたい腕輪が1500ユールずつ、生地が500ユールずつ、小物系が200と300ユール。つて所だつた。

まあ腕輪の付与があれの中で1番多いし、鑑定でもユールは2000までなら出してもいいって書いてあつたし、当然の値段だと俺も思うし

そして店から出たら『アイテム』の中に入れて、宿屋に向かつた。それから部屋に戻つて、ファッションショーをすることにした。クロに買った服を渡す。着替えてくると洗面所へ行き、俺はさつき買った布地の帽子を作るよう用意し始めた。しばらくチクチクしていると、クロがバーンと出てきた。

「クロ、似合うな」

「えへへ♪ 店員さんの選んでくれた服は僕のサイズにピッタリだつたんだ! それに、黒の羽織もなんだか魔法使いになつた気分になれて、とっても楽しい♪」

「それはなによりだな」

「ハルさんはまだ服着ないの?」

「俺は今、クロの帽子を作つてるからな。それが終わつたらお披露目会をするよ」

「うん! わかつた、待つてるね!」

「ああ」

またチクチクを再開した。技能にも『裁縫』があつたので、スムー

ズに縫えている。この世界にミシンは置いてない。だから、面倒だが自分の手で縫うことになる。

まあ、異世界と比べたらいけないか：

しばらくして、猫耳ニット帽が完成した。ちゃんとクロの猫耳がどの位置なのかを確認しながらなので、少し遅くなってしまったが、とりあえず着けてもらうことにした。バツチは帽子を着けた後にどこに付けるかを決めるため、必要なこと。

「ピッタリ頭にハマつた！しかも、伸びるゴムが入ってるから耳がない人でも使えやすいかも！それに、ボクの耳がかさばることも無いからつらくない！」

好評価だった。そして気に入ってくれた。それから俺はバツチを付けるための目安を測った。そしてまた、チクチク。クロはニット帽を外して俺の横に。またしばらくして、やつと終わった。

「できたー！！」

その間寝てたクロは俺の音声に耳を塞いで、ビクビク震えながら起きた。俺はハツとしてクロに駆け寄り。

「う、ごめん…クロ…。わざとじゃない、わざとじゃないからな…？」
ギュッと抱きしめ頭をポンポンと撫でた。小さく頷いたクロ。ホツとして、クロに見せるとさつきの震えは嘘のようにはしゃいだ。それから俺は『神の加護』である『付与魔法』が使えることが判明してから、バツチのみに『防音』を付けた。

ちなみにどこで判明したかと言うと、あのギルドで適性検査を受けた際に見つけたんだ。下にスライド式なんて聞いてない：つて思ったのを覚えてる

黒猫バツチを右上に付けて、その斜め下に黒猫バツチよりも小さい星を付けた。もう片方には小さな星のバツチを2つ付けたので、黒猫バツチの方にある星には付与していないが、小さい星の方には付けて完成。

『完全防音』なんしたら俺の声まで聞こえないからな。それに帽子にまで『防音』付けたら、足音が見失う可能性もあった。用心に越したことはないが、ちゃんと付ける所を間違えないようにしないと大事

だ

クロの帽子が出てきた所で、俺も服を持つて洗面所に行き着替える。こういう羽織なら下は、黒無地の七分袖に黒の黒無地のすらつとしたズボン。ベルトを絞めるほどガリガリでも太つてもいなから、無し。幸いにも、パークー付きだったようで日焼け対策もバツチリ。それから、洗面所から出て俺のお披露目をするとクロが目を輝かせて好評価してくれた。

可愛い体格でカッコイイ服を着こなすハルさんは、やつぱり凄い！
……って褒めてくれるのは嬉しいが恥ずかしいな、コレは…：

そういえばと、頭の中で思い当たり1度クロには服とズボンを脱いでもらつた。顔を赤くしながらムツとして俺を見ていた。俺は、俺の羽織をクロに着させて待つように言つた。それから付与魔法で『変形自在』を付けた。これはいざ大人のクロになつても、猫の姿になつても服の大きさが変わるだけで破けたりはしないようにした。いつ何があるかわからないので、それを着せれば変に思われなくて済む。ニット帽は多分、この今のクロがつけたいと言い出すだろうから付与魔法は付けなかつた。もし、付けた方が良いと判断した場合のみ同じのをつけようと思う。終わつたので服とズボンを返した。

俺達は男同士なのになんて恥ずかしがるのか…

クロも男だし、俺も男だ。風呂に入れれば裸の付き合いつてなつて、恥ずかしがることないのにと思つてるとクロが俺の顔を見てムスツとした。

「ハルさんは全然わかつてないんだね。どういう意味が教えてあげるよ」

そう言つたクロは大人バージョンになつた。俺は少しドキッとながら、大人のクロを見た。それから。

「ハルさん、今着てる服とズボン脱いで？僕もここで脱いだから、ハルさんもしてね？」

言われた通り俺は脱ごうとした。それから何かに気がついてクロを見ると、視線をずっと俺に向けてた。なんだか恥ずかしくなり、手が止まる。ただ脱ぐだけなのに、どうしてか顔が熱くなる。

「まだ？」

「催促するようにクロが言つてきた。俺はヤケになつて脱いだ。
「それを僕に渡して？」

言われた通り渡した。それから何もしない。ずっとクロが俺を見てるだけ。恥ずかしくて何故か今の姿を隠したくなつた。隠そうとした瞬間。

「男同士なんだから隠さなくともいいよね？」

俺はその時、ハッと気づいた。クロが俺に伝えたかつたこと、それはさつきのクロの気持ち。俺は羽織りを貸してあげたが、もし視線に気づかなかつたらこうなつてた。俺はクロに羞恥プレイをさせる所だつた。

いや、もうさせてたかもしれないが…

「…、クロ…」

「何？」

「ごめんなさい…」

「うん、わかってくれたならいよ」

顔が真っ赤な俺。服を渡すクロ。俺は服を急いで着た。自分の恥部を隠せるつて大きい事なんだなつてことが初めて知れた。これが他の人ならそうはいかない。貴族ならもつての他だ。それからクロは大きいまま俺の後ろから抱きしめ腕を掴み、耳元で。

「また1つ、知ることが出来たね？」

「ひんつ…!!」

ビクンッと反応した。俺はもしかするとそういう意味では弱いのかかもしれない。耳は1つしかない。人間の耳は俺にはない。しかも拘束されて身動き取れない。

「く、ろ…?」

「ふうー」

「ひやうつ!」

かもしけないじやない、俺の弱点が判明した。受身や構えを取らない限り、耳が弱い。わかってる仕打ちなら耐えられるかもだが、急でビックリした時はパニックになつてできない。それを見透かされた

ら終わり。

「……まだ、怒つて……？」

肩が震える。なのに顔が熱い。

「少しね」

「うう……ひやっ!!」

散々クロに耳で弄ばれた後、解放された。クロも元の大きさに戻り、俺はぐつたりしていた。いろんな意味で激しかった。俺の体験したことの無い体験をしてしまった気がする。

いや、まだ一線は超えてない!!……はず

とは言え、まだ昼間だ。お腹も空いてきたしランチにしようと思う。自分でも作れるが、料理に使う器具をそんなに持つてないので買えるようになつてからしようと思つた。とりあえずこの異世界での食を堪能しようと思う。というわけで、また宿屋の店主に聞いてどこか美味しい所はないかと聞いた。すると。

「ここを出て、左側沿いに歩いていくと『なんでも料理屋』って店に着く。その料理がこの村で1番旨い料理店だ。本当に名前の通り、なんでもある。行つて試しに注文すれば出してくれるよ」

「ありがとう」

言われた通り俺達はその店に向かつた。本当に『なんでも料理屋』と書かれた看板があつた。クロと手を繋いで入つていくと、そこに広がつていた光景は俺のいた世界のファミレスみたいだつた。配置がそう見えるからかもしれないが、これは本当にすごい。それとクロを見ると、耳を抑えることをしない。ということはちゃんと付与魔法が機能してゐる証拠。キヨロキヨロと興味津々に周りを見ている。俺達はカウンターまで歩き、カウンターの前で止まつた。

「あのー」

「ん?あ、いらつしやい」

「宿屋の店主にここを進められたんだが……」

「ここは『なんでも料理屋』！東方料理から地方名物料理まで置いてある所さ。東方料理をご所望なら、作り方を教えてくれさえすれば作れ

る。料理は料理だ、作つたことないなら聞いて作れば料理になる。なら、知らない料理もみんなの知る料理なら私に作れないものはないよ！」

本当に『なんでも料理屋』と名乗るだけのことはある
「何があるんだ？」

「メニューがあるだろ？これを見て決めておくれ」

渡されたメニューは地方名物料理が紙1枚分使い、東方料理はそこまでなかつた。

「クロはこの中で何が食べたい？」

「ハルさんと同じのがいい！」

「うーん、そつか。俺の今食べたいものは……」

俺の今食べたいもの、それはやつぱりオムライス。25歳になつても、母親が昼飯をオムライスにして出してくれてた。そのオムライスが日常だつたから、『昼飯＝オムライス』みたいな感じのができたわけだ。けど、このメニューには載つてないようなので教えることにした。

ここで、料理の知識技能が発動するわけだ！

俺はメニューを返して、注文をする。普通に。

「オムライスがいい」

「おむらいす？」

「ああ、分からぬみたいだから今から教える」

「ああ、わかつたよ。なら、この紙に書いてくれるかい？材料と作り方を書いてくれさえすれば作つてやる。その、おむらいすつてやつを」
まあ、わからぬから東方料理は全てひらがななんだろうけど：

俺は渡された紙にスラスラと書いていく。俺が作つたわけじやないのに、作つた人のように頭の中に知識が流れ込んでくる。オムライスの中身は様々だ。人によるし、家庭による。俺の家で出されるオムライスはチャーハンの具材がオムライスだ。俺はあんまり好き嫌いはないがチャーハンは何故かどうしてもダメだ。

もしかすると、量が多いとかそういう理由かもしけねえけど…。オムライスになるとコンパクトになつて量もそこまで入つてる気がし

ないから、食えるのかも

一通り材料と作り方を書いたら、料理屋の店主に渡した。紙を一目で見て親指を立てて、厨房の中へ。俺とクロは近くの空いてる席に座つて待つことに。

そういうばこの世界に【ケチャップ】って、調味料あんのかな…? ないなら、書いといやろうかな

そう思つた俺はペーパー紙にまた書き始めた。料理の知識は俺の思つてる以上に凄かつた。俺はケチャップの作り方なんて知らない。知つてるのはトマトが入つてること。トマトケチャップつていうくらいなんだから、トマトは主役なのは知つてる。が、それ以外は知らないしアツチでは普通にある調味料。

けど、ここは異世界だ。あるわけないだろしこのメニュー出るなら教えてあげたらもつと、料理の幅が広がるよな

オムライスを待ちながら書いていると、厨房から店主が出てきた。
「お前さん」

「ん?」

「ちよつと聞きたいんだけどね? この、けちゃっぷ? つてなんだい?」
やつぱり来た

「これは調味料だ。塩とか砂糖とかと、あれと同じ。レシピ書いたから、作つてみてくれ」

と言つて渡した。用意が良いと褒められた。それからまた中に入り、少し時間がかかつたがようやくオムライスが俺とクロの目の前に現れた。見た目はアツチで生きてた時と同じ。写真にあるような見た目だった。

すごく美味そう

クロを見ても早く食べたいと俺に訴えている。スプーンを取つて。

「いただきます」

「いただきます!」

その挨拶をしてから食べ始める。食べた瞬間口に広がつたのは、母親の味。誰かの料理なのに何故か母親を思い出した。こんなに上手ではない母親だが、味付けが同じだつた。オムライスの具材はなんで

もいいのにこんなに再現されてて、俺は思わず涙を零した。クロは美味しそうに食べている。俺は涙を出しながらオムライスを噛み締めた。アツチの世界の人間関係に未練はない。が、俺の生活には未練があつた。そしてその生活にはいつも母親も関係してて、25にもなつて反抗期をやっていた。母親はすぐ心配性で兄貴や父親はほつとけつて言つても、ほつとかなかつた。俺自身も鬱陶しいと思つたことがあるのは覚えてる。

けど、鬱陶しいと思いつつ母さんの作るオムライスだけは逆らえなかつた。あれは旨かつたから。反抗してた気持ちなんてどつかに捨ててきたかのように、母さんのオムライスが好き。それをここで思い出すなんて…。もう届かねえが、母さんありがとう。ありがたく食べるから。俺なんかにたくさん愛をくれて、ありがとう。それから、俺を産んでくれてありがとう。もう俺の世話をしなくて済むから、自由に生きてくれ

そう思いながら食べた。顔がぐぢやぐぢやになりながらも、ありがたみを知つた俺はゆつくり食べた。しばらくして食べ終わり、会計を済まして去ろうとしたら料理屋の店主に引き留められた。

「ちよい、お前さん

「ん? どうかしたか?」

「お前さんのおかげでまた料理の幅が増えた! ありがとね! また何か食べたい時は、いつでもここへ来な! おむらいすも他の料理もまた教えてくれる料理も待つてるからね! それじゃ、またのお越しを!」

手を振つて俺達は店から出た。それからまた宿屋に向かい、宿屋の店主に薦められた料理店のことを感謝し部屋に戻つた。

この時、調味料ケチャップのおかげで料理の幅を広げた店主の料理は、他にも活用出来ることを知り噂が噂を呼んで繁盛するようになつたなんて駆け出しの俺には、知らない情報であり後で知ることになつた。

一休みを兼ねてベッドに寝そべろうとした瞬間、クロに止められ

た。理由は口に付いたケチャップを拭うようにと。確かにこのまま寝れば枕についてシミになる。あれは地味に取れないし、この世界にはシミ取りなんてなさそうだ。なので俺は紙で口元を拭きそれをゴミ箱に捨てた。そして口元についてないかを確認した所で、改めてダイブ。同じくクロもダイブ。ぬくぬくしてから、次はどうするかを考える。時刻はアツチの時間で言うと15時だろう。正確な情報なんてこの世界にないが、なんとなくだつた。

何もする気になれない…。こういう時、いつもゲームとかスマホとか見て時間を潰すのにと思いながら寝返りを打つ。それが日常だがここにはない。本当に暇だ

朝早かつたのもあって眠い。このまま寝てしまおうかと思い目をつぶると、俺は即夢の世界へダイブしていた。

夢の中で俺は、俺のお葬式をしていた。母さんも兄貴も父さんも泣いてた。俺の写真はあんまり見えなかつたが、それでもみんな泣いてくれていた。母さんに至つては俺の事を本当に愛してくれてだから、崩れていた。俺は体を動かして母さんの元へ。

「母さん…」

「遼…遼…、不甲斐ないお母さんでごめんなさいね…? もつとあなたを見てあげれば良かつたわ…。悩みとか相談とか、もつと聞いてあげればよかつた…。そしたら、まだ違つたかもしけないので…。お父さんやお兄ちゃんがどう思つても、私はあなたの母親…。母親が息子を愛さないなんて、ありえない。でも、この世にもうあなたはいない…。最後にオムライスを食べててくれたのはいつかしら…つ…。あなたにも美味しい美味しいって、言つてくれたのは…いつだつたかしら…つ…、遠い昔のように思えてくるわ…つうう…。もし、天国でもオムライスが食べれたら私のことを思い出してね…? 私も少ししたらそつちに行くわ、そしたらまたオムライスを作つてあげるわね…遼…」

最後まで母さんは俺の名前を『はる』と呼んでくれた。他是名前を呼ばないか、『りょう』って呼ぶ中、母さんだけはちゃんと呼んでくれ

た。その後の葬式は終わり、帰宅した母さんは疲れたのか布団の中に入り眠つた。俺は母さんの枕元に行き正座した。

「母さん」

「ん……、だれ…？」

「俺だよ、ハルだよ」

「はる…つて…遼!？」

ガバッと起きたお母さんは俺を見た。そしたらまた母さんは泣いてしまつた。夢の世界で会えるなんてと言いながら泣いてる。俺は随分と昔にやつてたハグを、25の状態で抱きしめた。母さんも抱きしめ返した。泣きながら俺は母さんに話した。

「今日、俺は感謝を言いにここに来たんだ」

嘘は言つていない。夢を見てるからとかは言えないが、さつきのお葬式とかを思い出すと感謝したくなつたから。そんなこと恥ずかしくて言えない。

「お葬式の中、みんな違う名前で呼んでたり名前つすら呼んでくれなかつたのに、母さんだけは俺の名前を呼んでくれた。すごく嬉しかつた。今まで感じてなかつたけど、こんなにも嬉しいつて思えるなんてとか思つた。母さんのおかげだよ。それと、オムライスはこっちでも食べれてるよ。母さんの味に似たオムライスだつた。思わず母さんのことを思い出したよ。てか、テレパシーか何かで見てるんじゃないかつてくらい的アタリが良かつたのが、ドンピシャだつた。やっぱ、母さんつてスゲーつて思つたよ」

自分の言いたいことや話したいことを俺は、包み隠さず話した。母さんはうんうんと言いながら聞いてくれてた。俺はその中で生きてた時の思いを伝えた。

「俺さ、ずっと母さんが鬱陶しいつて思つてた。心配してくれるのは嬉しいんだけど、心配し過ぎなのはちよつとつて思つてた。父さんと兄貴も俺の事放つてたし、俺も放つておいて欲しいとか思つてた。でも、母さんがいつも俺の事を心配してくれるのは、心のどこかで本当は嬉しいつて思つてたのかもしれない。鬱陶しいつて思う気持ちは全面的に出てたかもしれないけど、そう思つてくれるるのは他人の母親

じゃなくて実の母親なんだって、今思うのは今更なんだけどそれに気づいた時にはもう、俺は死んでた。そして今、俺はずつとずつと言えなかつたことを今から言おうと思う。今言わないと一生後悔する気がするから」

母さんは何も言わずにただ頷くだけで聞いてくれてた。聞いてくれることがこんなにも、嬉しいなんて死んで始めて知つた。生きてた頃からそうしてくれれば良かつたとか思つてしまふ。

「ありがとう、俺のことを見て俺のことを心配して、俺のことを支えてくれて。ありがとう、俺を産んで育てて、ここまで成長を見守つてくれて。それから、ごめんな? 母さんよりも先に死んでしまつて、反抗ばつかして、全然手伝えなくて、本当にごめん…。死んでからじや遅いのに、こんなにも長く、こんなにも迷惑かけてごめんなさい…」

感謝から謝罪へ、頭を下げながら言う。俺も泣きそうになつてた。母さんは聞きながらすでに泣いてたけど、それでもただひたすら俺の話を聞いていた。

「俺、母さんの子供でよかつた。俺、母さんのこと好きだよ。大好き。今日限りかもだけど、母さんに会えて嬉しかつた。こんなに語つたのは初めてかもしれないし、久々だつたかもしれないけど、母さんとこんなに語れて俺、楽しかつた。もう話せないけど、最後に母さんに渡したい物があるんだ。ちょっと俺の部屋に来て欲しい」

そう言つて母さんを起こし、母さんを俺の部屋に連れてゴソゴソと何かを取り出した。それは25になつて初めて母の日に送ろうと思つてた、造形花だつた。母さんの好きな色である緑や青、紫などの寒色系。普通は赤とかピンクを送るべきだつたと思ったが、他でもない母さんに送るなら母さんの好きな色を渡したいと思つていたから。母の日に送ろうと思つてたのに反抗して渡しそびれたやつ。花は花でも造形、枯れることは無い花。それを母さんに渡した。

「これが夢の中ならもしかしたら、手元にないだろうと思うから。位置だけ教えとくね。この造形花はあのダンボールの中にある、あの箱の中に入れてあるよ。捨てようとか思つてた時もあるけど、せつかく

送ろうと思った物だから形このままにして置いてあるよ。母さんに渡したかつたから、気に入つて貰えると嬉しいな。もし、氣に食わなかつたら捨ててくれて構わないから。でも最後にちゃんと渡せてよかつた。反抗した状態で渡すよりもずっと良いから。母さんに感謝を込めて、これを贈るよ」

泣きながらニコッと笑うと。母さんは口を開けてやつと言葉を吐く。

「ありがとう、遼…。大切にするわ…、私が死ぬ時は棺桶にこれをいれてもらうつもりよ。もう、あなたはいなければ、これがあなたの代わりになつてもずっと愛し続けるわ…。ふふ、こんな贈り物を用意してくれてたなんて、知らなかつたわ…？何があつてもこれは守るから、安心して行きなさい？最後に本当に、あなたに会えて良かつたわ。ありがとうございます、遼。愛してるわ…」

やつぱり俺の母さんは、俺の事を心の底から愛してくれる人だつた。俺はもう一度ハグして、それから夢から覚めるとわかつた時に離れ、そして。

「行つてきます、母さん」

「行つてらっしゃい、遼。元氣でね」

「うん、母さんも。元氣で」

そう言つて俺は、それを最後に夢が覚めた。俺の目からは涙が零れていた。目が覚めて次に気づいたのはクロだつた。クロは心配そうに俺を見てた。

「おはよう、クロ…」

「おはよう、ハルさん…」

紙で拭いてくれるクロ。なぜ泣いてたのか、どんな夢を見ていたのかをクロに話した。すると、クロも貰い泣きをしながら聞いてくれた。それからおいおいと泣いてしまつた。クロの頭を撫でながら。「ありがとうございます、クロ」

と呟いた。しばらく頭を撫でていると2人してお腹の音が鳴る。窓の外を見ると夜だつた。灯りが付いてるということはまだ、お店が開いてるということ。俺とクロは支度して、またあの料理屋へ行くこ

とにした。次はこの異世界の料理を食べてみようと思つたから。

『なんでも料理屋』の中へ入ると、ほぼ満席だった。とりあえずカウンターの方へ行くと、店主がちょうど出てきた。なんだか忙しそう。

「ああ、ごめんよ！今忙しくてね！猫の手も借りたいくらいなんだ！料理をしながら客を回すのがこんなに大変だとは知らなくてね！あの席なら空いてるから、あそこに座つて待つてな！」

「わかった」

クロと一緒に空いてる席に座る。そしてみんなが食べてる料理を見た。そこにはケチャップらしき赤い調味料が料理に乗つていた。俺の見たことのない料理だけど、みんな美味しい美味しい言いながら食べている。

俺が教えたケチャップがこんなことになつて、びっくりだ

⋮

来たばかりの人気が注文したり料理を置きながら注文を取る店主、見ていて手伝いたくなつた。冒険者だけど、こうなつたのは俺の責任。俺は店主に。

「お腹はすいてるけど、何か手伝えるか？」

「良いのかい？結構大変だよ？」

「困つてゐる時はお互ひ様です！ハルさんが手伝うなら、ボクも手伝います！」

クロも賛同してくれたので、俺は真剣な目で見つめる。店主もその目に負けて、色々と教えてくれた。それから俺達は冒険家業の前に、お店の手伝いをすることになつた。これも経験するべきこと。

店主が言うには、頭ではもう何を頼むお客様わかるらしいが手が回らないと料理を作る暇もない。だから注文をお願いしたい、それからもし頼めたら、何番テーブルかも聞いてきてくれると助かる、だつたか

クロと手分けして紙を四つ折りにして、何かの板に貼り付け注文を聞く。それからまだ来たばかりなので、ここがどのテーブルかも聞きながら、注文を書く。次々と来る注文の半分をクロに任せて、俺はも

う半分の接客をする。アツチでは全然体験したことがないから、勝手がよくわからなかつたがファミレスに入つたことがあるので、それを見て真似てる。一通り注文の波が終わると俺達は、店主にメモを渡す。親指を立てた店主が、厨房の中へ。それから出来上がつた物を俺達に教えるながら、客のいるテーブルに置いていく。それを繰り返す。この体型だから動くが25の俺だつたら、絶対にバテてる。それくらい大変な作業。

これを毎日やつてるのかと思うと、凄いな…

そして、ひと休みすることなく働きやつと人もまばらになつてから、クロと共に席に着いた。息はしてたが息をしてる感覚はなかつた。運動不足な体つきはしてないから動けたものの、安請け合いでこんなことを求めるべきではなかつた。それでも助け合いはしたいと思つたから動いた。終わつた達成感にクロと笑いながら。

「大変だつたな…」

「そうだね…。でも、楽しかつたよ！またやりたいかも！もし、時間があつてまたこうなつてたらさ…！」

「そうだな…、ただ体力が持たなかつたら意味ないから明日からやるぞ？筋トレも含めて色々…」

「うん！手伝うね！」

「おう、頼んだ…」

そういう会話をしていると、厨房から店主が出てきた。時間も時間でもう飯を食べる時間ではないらしい。店じまいを始めていた。俺達も帰つた方がいいのではと思ったが、座つてるように言われた。店を開めた店主が俺たちの方へ來た。

「今日は色々とありがとね！おかげでなんとかお客様を満足させることができた！お前さん達には感謝しかないね！本当にありがとう！」

「いえ、元はと言えばケチャップを教えた俺の責任だし。それに、俺自身その責任がなくとも助けたいって思ったので」

「その気持ちだけでも嬉しいよ！さて、お前さん達にもちゃんとご褒美をあげないとね！何が食べたい？なんでも作つてやるよ？」

店主が感動のあまり目をキラキラしながら感謝していた。それか

ら俺達に注文を聞いてきた。

「んじゃあ、今の気分はこここのオススメが食べたい」

「どれもオススメだよ？」

「じゃあその中で人気なのがいいかな」

「そうかい！2人分でいいのかい？」

「ああ、それでいい」

オススメをつて言つたにも関わらず、店主がいくつか質問してきました。

「辛いのは食べれるかい？」

「いや、できれば甘い方がいいな。クロも同じで」

「濃さとしては？」

「そこまで濃いのはちょっと…」

「ふんふん、だいたいわかつた。味付けは塩と醤油だとどっちがいい？」

「うーん？何を用意してくれるんだ??」

こんなにも質問してくるなんて、変なものでも出す気なのかと思つてしまつた。店主は。

「この店で1番人気はラーン・マーンだよ」

……ラーン・マーン??

「麺を使った料理さね。地方料理で、ここに来た人が教えてくれた物さ」

うーん、麺料理で塩とか醤油とか使うのは俺らで言う所の【ラーメン】しか思い浮かばない…

「とりあえず塩で」

「ボクも塩でお願いします！」

「あいよ！ちよつと待つてね！」

そう言つて店主は厨房の中へ入つていた。本当に【ラーメン】なんか、この目で確かめたいが俺は醤油より塩派なのでとりあえずこつちにした。濃さとか辛さともラーメンならありえる。時間が経つて少ししていると。

「お待たせ、ラーン・マーンだよ！」

出てきたのは大きなお椀に麺とスープが入った【ラーメン】だった。正真正銘、これは俺達の知るものだつた。匂いを嗅ぐと鶏ガラスープ的な感じ。クロと共に手を合わせて。

「いただきます（！）」「

と、一言言う。そしてぞぞーと食べると、まさに塩ラーメンだった。

超絶旨い!! ちょっと塩ラーメンにアレンジが加わってんだけど、知ってる飯だ!! これはいい!!

すぞぞーと食べる俺達は夢中になつて食べてた。そしてそんなに時間をかけずに、汁まで飲み干しそして。

「〔ご〕馳走様でした！」

と言つた。店主は俺達のこの掛け声に疑問を持つたのか質問してきた。

「その、いただきますや〔ご〕ちそうさまつてのはなんだい??」

「えつと……」

「これはボク達の故郷の文化で、作ってくれた人に感謝をして食べるための挨拶みたいなものです。このスープに使つてる動物達や、この麺がどうやって作られてきたかの原点などの生産者の方にも感謝をして、『いただきます』。確かにそういう意味だつたと思ひます。そしてちやんと食べ終えました。みんなの分もボク達が背負つて生きていきます。本当にありがとうございました。みんなの分もボク達が背負つて生きます。ボク達は生きていくために食べなくちゃいけない、その中には犠牲を払つてくれる生き物達に感謝をしなくちやいけない。だつて、ボク達と同じように生きてたんだから。それなのに、なんの感謝もせずにのうのうと生きるなんてそれは許されないことです。だからボク達の故郷ではその感謝を忘れないために、この挨拶をして食べるんです」

とてもわかりやすい、丁寧な説明だつた。俺にはこんな風に言えない気がする。それを聞いた店主は驚きながら、呟くように。

「へえ！ その故郷の挨拶、ここでも使つていいかい？ 確かにここの料理で使う生き物達は私達と同じで生きていたのは事実。それを感謝

もせずに食べるなんて、あつちやあいけない！これから浸透させることにするよ！お前さん達には本当にいろんなことを教えてくれる！良い子らだよ！」

店主の笑顔が眩しかった。本当に嬉しそうだつたから。俺達も嬉しくなつた、こんなにも感謝されると思わず笑顔になる。すると、何かを思い出すように店主が俺達の名前を聞いてきた。

「また助けて欲しい時や、私がお前さん達を助ける時に役に立つかもしれない！お前さん達の名前を聞かせてくれるかい？私はマリサ。マリサ・リンネットさ。みんなからはマリサさんと呼ばれてる。あとは姐さんかしらね。私の地元はここじゃないけど、ここで働いてもう7年は経つてるよ」

「俺はハル、こつちは相棒のクロ」

「よろしくお願ひします」

「ハルとクロね！よろしく！」

自己紹介が終わつて俺達は店から出た。それからまた宿屋に向かい、宿屋の店主から鍵を貰つて部屋に行く。それからキツくない服装に変えて、口元を拭きそれからベッドにダイブした。するとクロが俺のベッドの中に入ってきた。どうしたのかと思つたら。

「またハルさんが寂しい思いしないように、今日はボクがハルさんと添い寝してあげる。昼みたいに泣いてたら心配しちゃうもん。ハルさんのためにそばに居るつて決めたんだから！」

そう言つてくれた。俺はクロの頭を撫でながら。

「ありがとう。じゃあお願ひするよ」

「うん！」

そう言つてクロは布団の中に入り位置を確認してから。いつものようにな。

「おやすみ、ハルさん」

「ああ。おやすみ、クロ」

そして2人で眠つた。変な夢も悲しい夢も見ることなくぐっすりと。また明日、元気に活動するために。明日は明日の風が吹く、みたいに。